

宮古諸島から新たに見つかった維管束植物

横田昌嗣¹・阿部篤志²・佐藤宣子³

¹琉球大学理学部海洋自然科学科生物系、²沖縄美ら島財団総合研究センター、³宮古島市教育委員会市史編さん室

要旨

宮古諸島の維管束植物相に関する最近の調査で、宮古諸島からの新記録種と新産地が幾つか確認されたので報告する。宮古諸島から新たに確認された種としては、イブスキイノモトソウ（イノモトソウ科）、カレンコウアミシダ（オンダ科）、リュウキュウコマツナギ（マメ科）、オキナワツゲ（ツゲ科）、ウスゲチョウジタデ（アカバナ科）、ゴバンノアシ（サガリバナ科）、リュウキュウチシャノキ（ムラサキ科）、サツマイナモリ（アカバナ科）があげられる。宮古諸島から既に報告がある種で、今回の調査で新産地が確認された種としては、サキシマエノキ（ニレ科）、ハテルマカズラ（シナノキ科）、ケミズキンバイ（アカバナ科）、ミヤココケリンドウ（リンドウ科）、コニガクサ（シソ科）、ミヤコジマソウ（ゴマノハグサ科）、オオハンゲ（サトイモ科）がある。

はじめに

宮古諸島の維管束植物相については、初島ら（1975）によるまとまった報告があり、592種の野生種が記録されている。この数は、初島・天野（1994）によって集計されている沖縄諸島の1422種、八重山諸島の1283種（横田、1998）と比べると、島の面積を考慮に入れても著しく少ない。種数の少なさは、宮古諸島の最高海拔は宮古島城辺のミルク嶺の114.8メートルで、島全体が平坦で河川が発達しないことなどから、冷涼な環境や湿潤な環境を好む種の多くが欠落していることが主な要因であると思われるが、調査不足もその一因である可能性がある（横田、2011）。

2017年度に発行される予定の「宮古島市史（自然編）」作成のため、維管束植物相の基礎的調査を行う過程で、維管束植物の宮古諸島新記録や新産地が幾つか見つかったので、その一部を報告する。

調査地および方法

宮古諸島（多良間島と水納島を含む）の島嶼を対象として、維管束植物相の調査を行い、

可能な限り標本を採集した。証拠標本は琉球大学理学部の標本庫（略号RYU）に保管されている。宮古島市の天然記念物に指定されている種については、宮古島市の許可を得て採集を行った。引用する証拠標本については、採集地の島嶼名（宮古島については、旧市町村名）、採集者（横田）の標本番号、採集年月日を示した。沖縄県版（池原ら、2006）および環境省版レッドデータブック（環境省、2015）に絶滅の恐れのある種として記載されている場合は、その旨記した。

結果および考察

(1) イブスキイノモトソウ *Pteris* × *namegatae* Kurata (イノモトソウ科) 図1 A
宮古島 [平良 (MY18145、30-III-2014)]、伊良部島 (MY18431、14-VI-2014)

イブスキイノモトソウは、リュウキュウイノモトソウ *P. ryukyuensis* Tagawa とイノモトソウ *P. multifida* Poir.の種間雑種と考えられているもので、鹿児島県と沖縄県から点々と報告がある。沖縄諸島からは沖縄島、伊江島、瀬底島で発見されているものの（島袋、1985）、これまで宮古諸島からは記録されていなかった。今回の調査では、宮古島ではイブスキイノモトソウは、イノモトソウやリュウキュウイノモトソウと混生していたが、伊良部島ではリュウキュウイノモトソウと混生するものの、イノモトソウは発見することができなかった。

(2) カレンコウアマシダ *Tectaria simonsii* (Bedd.) Ching (オンダ科) 図1 B
伊良部島 (MY18741、20-X-2012)

鹿児島県の沖永良部島を北限として、沖縄県の伊平屋島、沖縄島、粟国島、南大東島、石垣島、西表島から報告され、台湾、中国、インドシナ、タイ、インド、スリランカに分布している（横田・豊見山、2006）。島袋（1997）には宮古島にも産するという記述があるが、倉田・中池（1985）でも宮古諸島の記録はなく、証拠標本に基づいた宮古諸島からの記録はこれまでなかった。鹿児島県と沖縄県の自生地は、ほとんどが石灰岩地である。伊良部島では2カ所で確認されたが、いずれも石灰岩地である。絶滅危惧II類（沖縄県）。

(3) サキシマエノキ *Celtis biondii* Pamp. var. *insularis* Hatusima ex Umemoto, Yokota et Kokubugata (ニレ科) 図1 C

宮古島 [平良 (MY19231、16-II-2015)、城辺 (MY19203、16-II-2015)、上野 (MY18515、1-IV-2014)]、伊良部島 (MY19332、5-IV-2015)

本種は宮古島と伊良部島に産するコバノチョウセンエノキの変種で、永らく裸名のままであったが、最近（Umemoto *et al.*, 2016）によって正式に記載された。宮古島（平良、上野）と伊良部島の自生地は以前から知られており、平良は基準産地であるが、城辺は新産地である。初島（1975）によると、ニューギニアとセレベスにも分布すると言うが、同じ変種であ

るかどうかについては今後詳細な研究が必要である。絶滅危惧 I B 類（沖縄県）、絶滅危惧 I A 類（環境省）。なお、基本種のコバノチョウセンエノキは、本州、四国、九州、朝鮮半島、中国に分布する。

(4) リュウキュウコマツナギ *Indigofera zollingeriana* Miq. (マメ科) 図 1 D
下地島 (MY18933、16-VI-2014)

国内では八重山諸島の石垣島、西表島、小浜島に産し、台湾（蘭嶼）、フィリピン、南中国、インドシナ、マレーシア、ニューカレドニアなどに分布することが知られているが、宮古諸島からは記録されていなかった。下地島は分布域の北限で、1カ所のごく狭い範囲に生育しているが、開花・結実する成熟個体が確認されている。本種は八重山諸島では草木染めの材料として用いられることがある（小橋川、2004）。

(5) オキナワツゲ *Buxus liukuensis* (Makino) Makino (ツゲ科) 図 1 E
宮古島 [上野 (MY18745、25-X-2014)]

本種は鹿児島県（沖永良部島）、沖縄県（沖縄島、屋嘉比島、渡名喜島、北大東島、南大東島、石垣島、西表島、与那国島）に産し、台湾にも分布するが、宮古諸島からは知られていなかった。本種は時に植栽されることがあり、本来の自生であるかどうかは検討が必要であるが、宮古島では自然度の高い石灰岩地の林内や林縁に生育していたことから自生の可能性が高いと思われる。絶滅危惧 II 類（沖縄県）、絶滅危惧 I B 類（環境省）。

(6) ハテルマカズラ *Triumfetta procumbens* Forst. (シナノキ科) 図 1 F
多良間島 (MY14855、22-X-2007)、水納島 (MY16154、16-VIII-2009)

本種は沖縄島（慶伊島）を北限として、慶良間諸島、宮古島、石垣島、黒島、西表島、与那国島、波照間島に産し、硫黄島、フィリピン、ポリネシア、ミクロネシア、メラネシア、マレーシア、オーストラリア、セイシェル諸島などに広く分布している。多良間島（図 1 F）と水納島からは初めての記録である。絶滅危惧 II 類（沖縄県）。なお、植物体が無毛である型は、変種ケナシハテルマカズラ（コンペイトウヅル）*T. procumbens* Forst. var. *repens* (Bl.) Hatusima として区別され、伊良部島と多良間島（図 1 G）に分布することが知られている。今回の調査では、多良間島ではハテルマカズラとケナシハテルマカズラは共に生育が確認されたが、生育地は異なり、混生はしていなかった。また伊良部島ではケナシハテルマカズラは今回は発見することができなかった。

(7) ケミズキンバイ *Ludwigia adscendens* (L.) Hara (アカバナ科) 図 1 H
池間島 (MY17715、17-XII-2013)、宮古島 [平良 (MY19482、29-VI-2015)、城辺 (MY14244、3-IX-2007)]

国内では沖縄県（沖縄島、北大東島、南大東島、宮古島、来間島、石垣島）にのみ産し、

熱帯アジアに広く分布している。池間島からは新記録である。宮古島では数カ所で確認されたが、来間島では確認することができなかった。絶滅危惧Ⅱ類（沖縄県）。

(8) ウスゲチヨウジタデ *Ludwigia epilobioides* Maxim. ssp. *greatrexi* (Hara) Raven (アカバナ科) 図1 I

宮古島 [平良 (MY19962、12-X-2015)]

本種は沖縄県では石垣島と西表島に産するが、宮古諸島からは記録されていなかった。宮古島の1カ所の湿地にごくわずかに生育が確認された。本州、九州、奄美大島、与論島に分布している。絶滅危惧Ⅱ類（沖縄県）、準絶滅危惧（環境省）。

(9) ゴバンノアシ *Barringtonia asiatica* (L.) Kurz (サガリバナ科) 図1 J
水納島 (MY16109、16-VIII-2009)

本種は国内では八重山諸島（石垣島、西表島、波照間島）に稀に産し、熱帯アジアに広く分布するが、宮古諸島からは記録されていなかった。沖縄諸島でも海岸に漂着した果実が発芽している場合があるが、本種は冬期の寒さで枯死してしまい、沖縄諸島からは定着した個体は確認されていない。水納島で確認された個体（図1 J）は樹高1メートル程度の幼個体であり、定着後数年間を経ているが、今後成熟個体になるかどうかについては引きつづき観察を続ける必要がある。絶滅危惧ⅠA類（沖縄県）、絶滅危惧ⅠA類（環境省）。

(10) ミヤココケリンドウ *Gentiana takushii* Yamazaki (リンドウ科) 図1 K
宮古島 [上野 (MY15649、14-III-2008)、城辺 (MY15627、12-III-2008)]、下地島 (MY17692、17-III-2013)

本種は屋久島、宝島、喜界島、徳之島、沖永良部島に分布するリュウキュウコケリンドウ *G. squarrosa* Ledeb. var. *liukiensis* Hatusima に近縁であるが、花冠裂片の形の違いなどで区別される。宮古島を基準産地として比較的最近 (Yamazaki, 2000) 記載された固有種で、宮古島以外の産地は知られていなかった。宮古島では2カ所に産するに過ぎないが、今回下地島の数カ所に産することが明らかになった。個体によって、花は2月頃から6月頃まで咲いているようである。絶滅危惧ⅠA類（沖縄県）。なお、基本種のコケリンドウ *G. squarrosa* Ledeb. var. *squarrosa* は、本州、九州、朝鮮半島、台湾、インド、中国、シベリアの温帯に広く分布している。

(11) コニガクサ *Teucrium viscidum* Bl. (シソ科) 図1 L
宮古島 [平良 (MY18809、14-VI-2014)]、多良間島 (MY17980、8-VI-2013)

本州、四国、九州、琉球列島に点々と産し、台湾、中国、インド、インドシナ、マレーシアなどに広く分布しており、宮古諸島では伊良部島と来間島に産することは知られていた（初島ら、1975）が、宮古島と多良間島からは標本にもとづく記録はなされていなかった。宮古

諸島では数カ所に産するが、多良間島では1カ所でごく少数個体が確認されただけである。

(12) リュウキュウチシャノキ *Ehretia dichotoma* Bl. (ムラサキ科) 図1M

宮古島 [平良 (MY17688、17-III-2013)]

日本では八重山諸島 (石垣島、西表島、波照間島、鳩間島、小浜島) のみから知られ、宮古諸島からは初めての記録である。宮古島では1個体が見つかっただけであるが、開花・結実する成熟個体である。台湾 (蘭嶼)、フィリピン、マレーシア、オーストラリア北部に分布し、宮古島は分布域の北限である。絶滅危惧 I A類 (沖縄県)、絶滅危惧 I A類 (環境省)。

(13) ミヤコジマソウ *Hemigraphis reptans* (Forst.) T. Anders. (キツネノマゴ科) 図1N

宮古島 [平良 (MY19062、16-II-2015)、城辺 (MY18935、16-VI-2014)]、大神島 (MY16560、22-X-2012)

本種は国内では宮古諸島にのみ産し、台湾 (蘭嶼)、フィリピン、インドネシア、ニューギニア、ポリネシアに分布する。宮古諸島では、宮古島と大神島 (安谷屋ら、1982) に産することが報告されており、宮古島市の指定植物になっている。今回の調査でも大神島に自生することが確認された (図1N)。また宮古島からは城辺のみから知られていたが、今回新たに平良の1カ所にもごくわずかに産することが確認された。宮古諸島は分布域の北限である。絶滅危惧 I A類 (沖縄県)、絶滅危惧 I A類 (環境省)。

(14) サツマイナモリ *Ophiorrhiza japonica* Bl. (アカネ科) 図1O

伊良部島 (MY19050、15-II-2015)

本種はベトナムや中国南部から、台湾や琉球列島を経て、九州、四国、本州にまで分布する。沖縄県では、沖縄島、石垣島、西表島に産し、非石灰岩地にも石灰岩地にも生えるが、湿度の高い環境を好むため、比較的個体数の多い沖縄島や西表島でも生育地は限られている。伊良部島では石灰岩地の岩場にごくわずかに生育していた。本種の分子系統地理学的な研究から、琉球列島では八重山諸島と沖縄諸島以北では遺伝子型が大きく異なることが報告されている (Nakamura *et al.*, 2010)。沖縄諸島と八重山諸島の間位置する宮古諸島の遺伝子型がどのような特徴を持つのかについては、植物地理学上たいへん興味深く、今後の解明が期待される。

(15) オオハンゲ *Pinellia tripartia* (Bl.) Schott (サトイモ科) 図1P

宮古島 [城辺 (MY18502、1-IV-2014)]

本種は本州、四国、九州に分布し、琉球列島の喜界島、奄美大島、徳之島、沖永良部島、沖縄島、伊平屋島、伊良部島に産することが知られていたが、宮古島にも産することが判った。宮古島では城辺の2カ所で確認され、いずれも石灰岩地の常緑広葉樹林内の石灰岩の岩の割れ目に生える。宮古諸島は分布域の南限である。絶滅危惧 I B類 (沖縄県)。

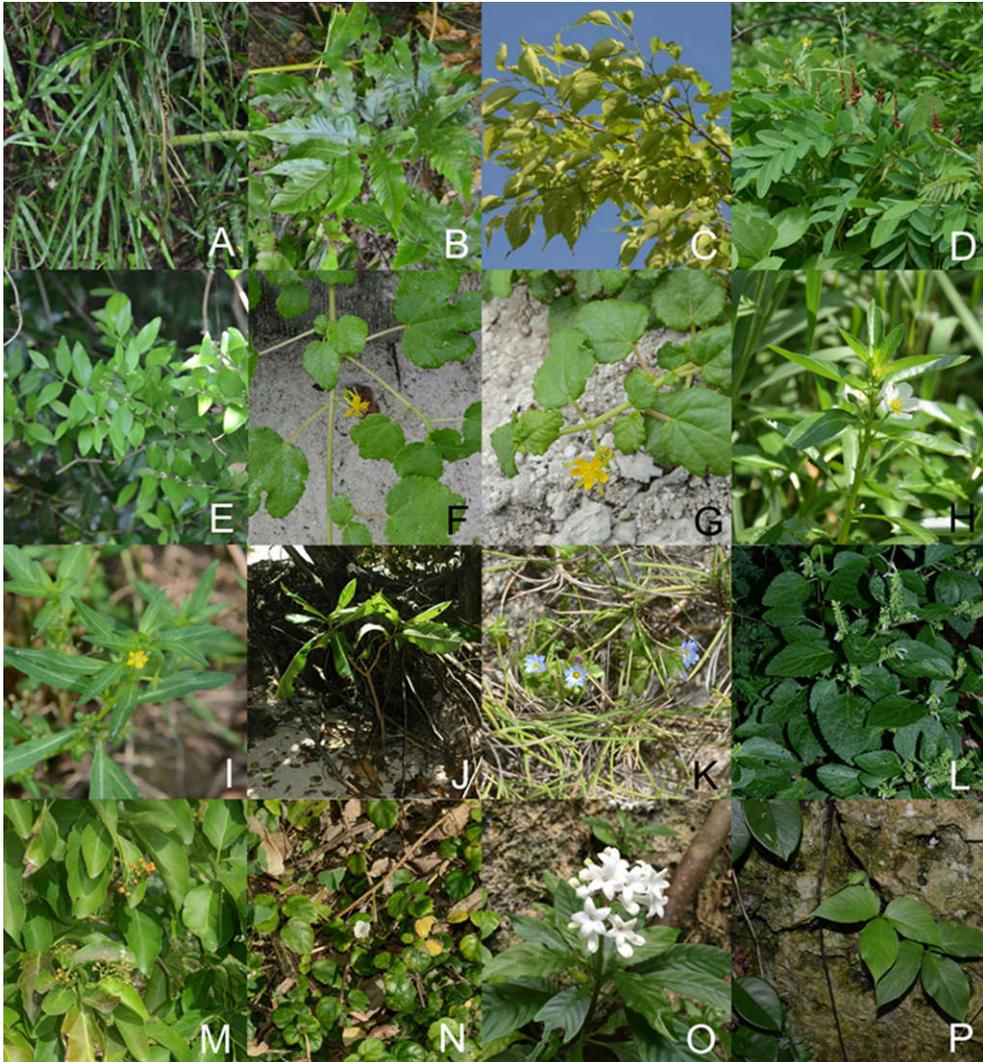


図1. 宮古諸島で新たに見つかった維管束植物. A : イブスキイノモトソウ (宮古島) . B : カレンコウアミシダ (伊良部島) . C : 果実を着けたサキシマエノキ (伊良部島) . D : 開花中のリュウキュウコマツナギ (下地島) . E : 花を着けたオキナワツゲ (宮古島上野) . F : 開花中のハテルマカズラ (多良間島) . G : 開花中のケナシハテルマカズラ (多良間島) . H : 花を着けたケミズキンバイ (宮古島城辺) . I : 開花中のウスゲチョウジタデ (宮古島平良) . J : ゴバンノアシの幼個体 (水納島) . K : 開花中のミヤココケリンドウ (下地島) . L : 花を着けたコニガクサ (多良間島) . M : 花と果実を着けたリュウキュウチシャノキ (宮古島平良) . N : 花を着けたミヤコジマソウ (大神島) . O : 満開のサツマイナモリ (伊良部島) . P : 花を着けたオオハンゲ (宮古島城辺) .

おわりに

今回の調査でわずかではあるが宮古諸島の植物相に複数種を追加することができた。中には、これまで琉球列島では高島だけから知られていたリュウキュウコマツナギやサツマイナモリが含まれる。今後これらの種の系統地理学的な研究を進めれば、不明な点が多い宮古諸島の成り立ちについて議論できる資料が得られるものと期待される。今回報告した種は、いずれも自生地と個体数が少ないものであり、宮古諸島では絶滅する可能性が極めて高い種と思われる。これらの種が絶滅することがないように、十分な保全対策を検討する必要がある。

引用文献

- 安谷屋昭・久貝勝盛・川上勲. 1982. 平良市教育委員会（編），平良市の天然記念物—調査報告集—。62 pp. 平良市教育委員会。
- 初島住彦. 1975. 琉球植物誌（追加・訂正）。1002 pp. 沖縄生物教育研究会。
- 初島住彦・天野鉄夫. 1994. 増補訂正，琉球植物目録。393 pp. 沖縄生物学会。
- 初島住彦・天野鉄夫・宮城康一. 1975. 宮古群島の植物。沖縄自然研究会（編），沖縄県立自然公園候補地学術調査報告，宮古群島，pp. 31-70, 沖縄県。
- 池原直樹・伊波善勇・尾川原正司・加島幹男・川上勲・北原孝・小林史郎・佐久本徹・新里孝和・新城和治・洲鎌栄徳・高良拓夫・澤岬安喜・立石庸一・豊見山元・仲田栄二・新島義龍・橋爪雅彦・治井正一・比嘉清文・平岩篤・前津栄信・松村俊一・宮城朝章・安田恵子・山城考・横田昌嗣. 2006. 種子植物・シダ植物。沖縄県文化環境部自然保護課（編），改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（菌類編・植物編），—レッドデータおきなわ—，pp. 57-360, 沖縄県文化環境部自然保護課。
- 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）。2015. レッドデータブック 2014，—日本の絶滅のおそれのある野生生物—，植物 I（維管束植物）。646 pp. ぎょうせい。
- 小橋川順市. 2004. 沖縄—島々の藍と染色。187 pp. 染織と生活社。
- 倉田悟・中池敏之（編）。1985. 日本のシダ植物図鑑，分布・生態・分類，第4巻。850 pp. 東京大学出版会。
- Nakamura, K., T. Denda, G. Kokubugata, R. Suwa, T.Y.A. Yang, C.-I Peng & M. Yokota. 2010. Phylogeography of *Ophiorrhiza japonica* (Rubiaceae) in continental islands, the Ryukyu Archipelago, Japan. *Journal of Biogeography*, 37: 1907-1918.
- 島袋敬一. 1985. 琉球列島シダ植物分布図集Ⅲ. 琉球大学理学部紀要, 40: 53-126.
- 島袋敬一. 1997. 琉球列島維管束植物集覧, 改訂版. 855 pp. 九州大学出版会。

- Umemoto, H., C.-H. Park, C.-X. Fu, T. Ito, M. Yokota & G. Kokubugata. 2016. Taxonomic reconsideration of *Celtis biondii* var. *insularis* in the Miyako Island Group of the Ryukyus based on morphological and molecular data. *Journal of Phytogeography and Taxonomy*, 63(2): 67-75.
- Yamazaki, T., 2000. A new species of *Gentiana* from the Ryukyus. *Journal of Japanese Botany*, 75: 280-281.
- 横田昌嗣. 1998. 沖縄県の絶滅危惧種. *プランタ* (55): 10-18.
- 横田昌嗣. 2011. 宮古群島の植物と自然. 宮古の自然と文化, 第3集, pp. 45-59, 新星図書出版.
- 横田昌嗣・豊見山元. 2006. カレンコウアミシダ. 沖縄県文化環境部自然保護課(編), 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物(菌類編・植物編), レッドデータおきなわー, pp. 345-346, 沖縄県文化環境部自然保護課.

宮古島市内の海軍砲台について

久貝弥嗣、山口直美、菱木勇一、西里咲子、川満広紀、森谷大介

はじめに

2015年は、1945年に太平洋戦争が終結してから70年の節目の年にあたる。この節目の年に際して、県内では各地で戦争をテーマとしたシンポジウムや研究会が行われた。宮古島市においても、第10回宮古島市民文化祭郷土史部門において「戦後70年と宮古～次世代の宮古を考える～」と題したフォーラムが開催され、各世代や立場をとおしての戦後70年そして今後の展望などについて意見交換が行われた。また、フォーラムに関連して宮古島市内の戦争遺跡の巡検も行われ、親子やグループでの多数の参加があった。

戦争遺跡の調査としても、沖縄県立埋蔵文化財センターが、2010～2014年度にかけて戦争遺跡詳細確認調査を行い、2015年3月に『沖縄県の戦争遺跡-平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書-』を発刊した。この報告書の中では、県内の戦争遺跡が1,076カ所に及ぶことを確認するとともに、145の戦争遺跡について詳細な調査報告が行われている。沖縄県では、これらの調査成果を踏まえ、2015年度より戦争遺跡の文化財指定作業を着手するとしている。宮古島市においてもこの確認調査によって、10の戦争遺跡の詳細調査がおこなわれ、西更竹司令部壕が新聞報道されるなど、非常に注目をあびた^(注1)。このような戦争遺跡への調査研究がすすめられるとともに、戦争遺跡の巡検なども活発に行われており、戦争遺跡への関心の高まりを感じ取ることができる。

近年の宮古島市の状況としては、長南陣地壕群や、村越陣地壕群、イリノソコ陣地壕群にみられるように圃場整備工事で新規に発見される壕が増えてきている。また、アジア歴史資料センターのインターネット検索を通して、数多くの戦史資料を確認することができるようになったのも、戦争遺跡の調査を行う上での大きな環境の変化の一つといえる。

これらの状況を踏まえ、宮古島市教育委員会では2015年度に一括交付金事業 neo 宮古島歴史文化ロード『綾道』の戦争遺跡編の刊行にとりかかっている。この事業の実施に際して宮古島市教育委員会では、これまで報告されている市内の戦争遺跡の確認調査などを行うとともに、体験談を再整理し、聞き取り調査などを実施してきた。その結果、いくつもの壕の新発見があったことは大きな調査成果といえる^(注2)。

この調査を通して確認された戦争遺跡の一つに与那浜崎に設置された砲台がある。本砲台は、これまでの報告書の中でも紹介されていることはあるものの、その詳細が不明なものであった。報告者らは、本砲台に関する簡易的な平面図を作成するとともに写真などの記録作業を実施し

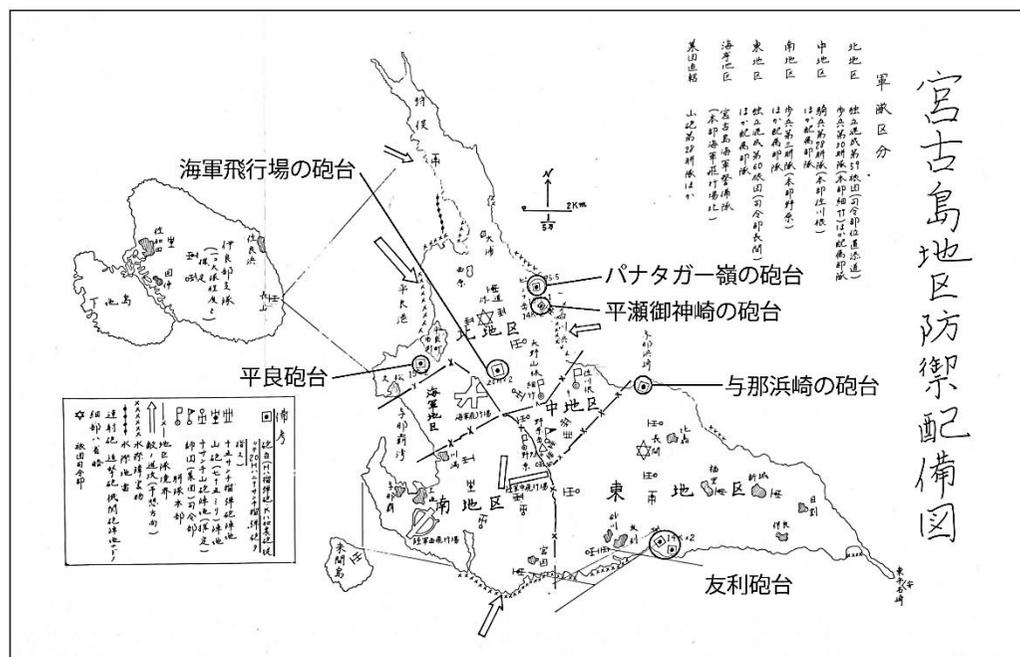
た。本論では、この与那浜崎の砲台に関する調査報告を行うとともに、その他の5つの海軍砲台についても再整理を行い、海軍砲台に関する歴史的背景について整理するとともに、砲台の形態の比較などを行っていきたい。

1. 海軍砲台の概要

(1) 海軍砲台とは

砲台とは、大砲などの火器を設置するための台座である。沖縄戦時、宮古島市内には六つの砲台が設置され、いずれも海軍に由来するものであったことから、海軍砲台と総称されている。宮古島市内には、これらの砲台とは別に、陸軍の山砲や榴弾砲を設置した壕として来間の山砲陣地壕や、牧山陣地壕などが確認されている。これらの壕は、いずれも石灰岩を掘りこんで構築するのみであるのに対し、海軍砲台は、砲台設置部分をコンクリートで構築しており非常に強固なつくりになっている。

海軍砲台は、当時の平良町、下地村方面に上陸を企図する敵艦戦を撃破する目的をもって配備されたとある(瀬名波編 1975)。本論では、この6つの砲台の名称について、それぞれの地域や地形などに由来して暫定的に「平良砲台」、「海軍飛行場の砲台」、「友利砲台」、「与那浜崎の砲台」、「パナタガー嶺の砲台」、「平瀬御神崎の砲台」と称して報告を行いたい。



第1図 海軍砲台の位置図(瀬名波 1975年「宮古島地区防禦配備図」に加筆)

第2中隊第1小隊はパナタガー嶺の砲台と平良砲台の構築へ、第2中隊第2小隊は城辺砲台の構築へ、第3中隊第1小隊は海軍飛行場へと配備されている。第2中隊第1小隊は、パナタガー嶺の砲台の完成後、狩俣にある特攻艇秘匿壕の構築にあたっている。この特攻艇秘匿壕は、現在の海中公園に隣接するヌーザンミという嶺に構築されており、「海軍特攻艇格納秘匿壕」という名称で、戦争遺跡としては宮古島市内では唯一の指定をうけた文化財である^(注5)。

大下氏手記によれば、海軍313設営隊は、海軍施設部のおかれた呉で編成されたことから、宮古島へむけての資材の調達には恵まれた環境にあったようである。4隻もの船にダイナマイト、木材、セメント、コンプレッサーなどを積載して宮古島へむけて出帆しており、陸軍の飛行場設営に際してはダイナマイト5トン陸軍からの要請により提供していることなどから、他の部隊に比して資材を豊富に有する部隊であったことがよみとれる。このような豊富な資材が背景にあったことから、短期間での各砲台や秘匿壕の構築が可能であったと考えられる。なお、大下氏手記の中にある城辺砲台については、その手記の中での砲台の位置を示した図から友利砲台に比定されるものと推察される。その一方で、与那浜崎の砲台と平瀬御神崎の砲台についてはその記述が見てとれることができない。平瀬御神崎の砲台については不明であるが、与那浜崎の砲台については、友利砲台と同じ城辺地区に位置している状況や、体験談・聞き取り調査の成果などから友利砲台の構築にあたった第2中隊第2小隊によって構築されたものと考えられる^(注6)。

(3) 大砲

次に各砲台に据え付けられた大砲についてみていきたい。各砲台に設置されたとされる大砲の種類を記した資料としては、『先島群島作戦(宮古篇)』、山砲兵第28連隊戦史資料(ref.C11110237800)、大下氏手記の3つがあり、それぞれに記されている各砲台の大砲を整理したのが表1である。これによると、平良砲台、海軍飛行場の砲台、友利砲台については、若干の違いが見られるものの概ね設置された大砲の規模や数をとらえることができる。その一方で、パナタガー嶺の砲台と与那浜崎の砲台についてはその種類も数にも大きな違いがみられる。これらの大砲については型式が不明であり、その詳細は不明である。また、大下氏手記のみ、大砲の単位の異なる非常に大型の大砲が設置されたとあり、その他の資料も含めて検討を要する。なお、那覇市当間海軍砲台には、現在でも大砲が唯一残る海軍砲台であり、重巡洋艦の主砲を転用したと思われる口径20cm砲が据え付けられている。

海軍砲台は、山砲兵第28連隊の指揮下にあり、各砲台に兵曹長以下25名からなる隊が充てられ、海軍砲台を扱う部隊として5隊^(注7)が編成されている(ref.C11110237900)。しかし、これらの隊に関する詳細については資料を確認することができず、友利砲台についてのみ体験談や聞き取り調査によってその利用部隊をしることができるのみである^(注6)。

表1 各砲台に設置された大砲の種類と数

砲台名	設置された大砲の種類				
	『群島作戦』		山砲兵第28連隊戦史資料		『海軍313設営隊戦記 と思い出』
平良砲台	15糎加農砲	2門	15糎加農砲	2門	14吋砲(戦艦の副砲)
海軍飛行場砲台	20糎榴弾砲	2門	短20糎榴弾砲	2門	
友利砲台	14糎加農砲	2門	15糎加農砲	2門	
バナタガー嶺の砲台	14糎加農砲	1門	10糎榴弾砲	2門	14吋砲(戦艦の副砲)
与那浜崎の砲台	14糎加農砲	1門	12糎榴弾砲	2門	
平瀬御神崎n砲台	12cm榴弾砲	2門			

2. 各砲台の概要

(1) パナタガー嶺の砲台

パナタガー嶺の砲台は、福山集落東の丘陵地であるパナタガー嶺(標高約 95m)の中腹部に位置する砲台である。パナタガー嶺の頂上部付近は琉球石灰岩で形成されるものの、嶺の下部においては、島尻層との不整合面も露頭している。この不整合面からは、水が湧き出ており、コンクリート製の舁に水をためている。また、その脇には、小規模な池も形成されている。パナタガー嶺の砲台の構築には、韓半島から強制連行されて



写真1 パナタガー嶺の砲台(砲台設置部分)

きた軍夫や近隣の福山集落在住の少年隊も駆り出されている。軍夫達は朝夕に「アラン」を歌っていたことからこの湧水地をアランガーと称している。

本壕は、琉球石灰岩を掘り込んで構築されている。壕口から砲門設置部分までは、約30m北へ直進した後、北北東に方向を変え約19m進む。すると砲門の設置のために壁面や天井部分がコンクリート造りになる。通路部分は、幅が3.1m、高さが2.7mほどと砲台をいれるために大きな作りとなっており、床面も丁寧に整地されている。この通路部分の途中には、左右に奥行2~3m程の小部屋が4つ設けられている。その内の3つの小部屋は、通路部分よりやや地下に下がるかたちで構築されている。コンクリート造りの部分は、ドーム型の形状をなしている。コンクリート部分は、戦後鉄筋がぬかれたために壁面が破壊を受け、床には、コンクリート片

が散乱した状態にある。コンクリートの壁面や天井部分には、構築時の板材の痕跡が明瞭にのこされ、当時の構築の様相をうかがい知ることができる。壁面の板材の幅は、0.25 cmである。天井部分には、0.3m×0.3mの方形型と直径0.3mの円形の空気坑が丘陵の上まで突き抜ける形で2箇所設けられており、途中までは、壁面をコンクリートで固めている。砲台は、東側、つまり白川浜を向いて設置されている。砲台が設置されていた場所の北側には、コンクリート造りの17段の階段が設けられ、着弾地等を確認するための窓へと通じている。

砲門は、白川浜の方向をむいている。これは、米軍の上陸予想地とされていた佐川根湾方面からの侵攻に備えるものである。本壕は、これらの当時の戦闘指導要領を伺いしる上で重要な砲台跡であるといえる。このような歴史背景や、良好な保存状態の点から宮古島市内の平和学習で訪れる機会も多い遺跡である。

(2) 友利砲台

友利砲台は、大きく東の砲台部分と、西の砲台部分、そして3つの壕で構成されている。西の砲台については、構築途中で終戦をむかえたとされる。

東の砲台の構築にあたっては、海軍313設営隊の他にも城辺青年団や周辺住民も砲台の構築をおこなっていたことが、体験談や聞き取り調査から確認されている。現在の城辺中学校の一带には、青年会場があり、そこには海軍の本部がおかれ、城辺青年団も寝泊りしながら友利砲台の構築にとりかかったようである。この海軍の本部については、海軍313設営隊の第2中隊第2小隊をさすものと推察される。また、仲原の公民館やアブチャー(通称・仲原洞穴)には、この砲台の資材が置かれていたとの体験談や聞き取り調査も確認できる。

友利砲台の利用については、宮古島海軍警備隊の江口隊(隊長・江口善太郎兵曹長)が指揮し



写真2 友利砲台(東砲台)の近景



写真3 友利砲台(東砲台)の弾薬庫

ていたようである。江口隊長は、仲原公民館近くに宿泊していたことが体験談や聞き取り調査から確認されており、5月4日の英太平洋艦隊による艦砲射撃に際しての友利砲台の指揮の状況なども確認できる^(注8)。

次に砲台の形態などについてみていきたい。東の砲台部分は、弾薬庫と砲台部分が交通壕でつながれている。弾薬庫は、岩盤を掘りこみ、内部をコンクリート造りで補強している。入り口部分の幅が約0.9m、高さ約1.7mで、西側を向く。入り口部分には、本来扉のようなものが設置されていたと考えられる金属の突起部が複数確認できる。内部は、両辺の長さの異なる長方形を呈し、長い方は約7.4m、短い方は約6.0mをなし、両辺に幅約0.15m、深さ約0.05mの溝を有している。入口の対辺は約1.9mをなす。内部の断面形はドーム型をなし、高さは1.9mである。この弾薬庫から砲台へむけては岩盤を掘りこんで交通壕が構築されている。弾薬庫前も最大高で約5m近い岩盤を掘りこんで広い空間をつくっている。この手前部分には、2つの石積みを確認できる。いずれも高さが約1m未満であるが、石灰岩礫とともに、麻袋に入れられていたようなコンクリート片も数多くみられる。

交通壕の砲台近くには、掘りこんだ岩盤の幅2mを端渡すように約30cmの幅でアーチ型つくりのコンクリート施設が構築されている。弾薬庫側の口は頭大ほどの石灰岩の石積みでふさがれた状態にある。コンクリートでアーチを作るなどの技術を用いられていることから何らかの機能を有していたと考えられるが、その用途については現在のところ判然としない。

砲台は、終戦後に破壊されたと思われる、現在では大部分が瓦礫に埋まった状態にある。しかし、コンクリート造りのドーム型施設の天井部分や入り口部分などを部分的に確認することができ、砲口は、西南西を向く。岩盤を掘りこんだ後にコンクリートで施設を構築している。コンクリート造りの施設の幅は分からないものの、奥行は約7.0mと推察され、内側の幅は約3.8m前後と推察される。コンクリートの幅は約0.5~0.6mと非常に厚く強固なつくりであったことがうかがい知れる。現在は、ほぼすべてが瓦礫に埋まった状態にあり、交通壕との連結が判然としない。しかしながら、砲台の両端の岩盤にはコンクリートの付着が見られることなどから、砲台の北西側に交通壕から砲台への入り口が設けられた可能性もある。今後の発掘調査でその形態を明らかにすることが望まれる。

砲台の西側30mの場所に、コンクリート造りの貯水池が確認でき、東の砲台に関連する施設と考えられる。貯水池は、長さ4.2m×2.2mの長方形をなし、中の両端1.2mは約0.7mの深度であるが、中心部は約2.0m以上の深度を有している。現在は腐葉土がへドロ状に堆積している。

(3) 与那浜崎の砲台

与那浜崎の砲台は、長間底海岸を望む標高80mの与那浜の突端部(与那浜崎)に位置する砲台である。城辺の北海岸をまわる県道83号線沿いからユースヌス御嶽へ向かうように農道へ入ると、現在はサトウキビ畑が広がっている。サトウキビ畑から北側部分は海岸へむけての急崖をなしており、砲台はこの急崖部分の石灰岩を掘りこんで構築されている。そのため、砲台直上

は、現在のサトウキビ畑として利用されていることとなる。

与那浜崎の砲台の構築にあたっては、海軍313設営が中心となり、山砲兵や住民もかかわっていることが確認される。山砲兵第28連隊の第7中隊神田文男の体験談『遙かなる宮古島』によると、第7中隊の一部は比嘉の集落に幕舎を設け、与那浜崎の砲兵陣地構築にとりかかったとある。また、体験談などから、比嘉や西城の住民も砲台の建築にかりだされたことが記されている。

砲台構築後に、具体的にどの部隊が砲台を管理・使用したのかは資料が非常に少ない状況である^(注6)。しかし、山砲兵第28連隊の戦史資料(ref. c11110237800)によると「與那浜砲台十二榴二門」とあることから、与那浜崎の砲台には12榴榴弾砲が2門設置されたことになる。体験談によると何十発か実際に撃っていたようである。

現在、砲台へ出入りを行っているサトウキビ畑からの急崖部分にあく壕口は、本来の砲口であったと考えられる。砲口部分も含め、砲台は全体的にコンクリート造りの強固なものとなっている。砲口は、ほぼ真西をむいており、前面には長間底海岸を望む。砲口の大部分は、多量の土砂が流れ込んでおり、その全体像を確認することができないが、砲口部分の幅は現況としておおよそ5m前後で奥行は6～6.5mにも及ぶ。土砂の堆積が厚いため詳細な高さを計測することはできないが、天井までの高さは、2m以上に及ぶことは想定される。砲口部分から約6.5m東進すると南東側に壕が折れ曲がりコンクリートのアーチ型の作りとなる。約4.3m進むともう一つの壕口にいたり、本来の出入り口がこの壕口から行われたものと考えられる。この南東側に折れ曲がったアーチ型の壕内には、左右に1つずつ小部屋へむかう出入り口が設けられている。北東側の小部屋はコンクリートづくりで、五角形の形態をなし、天井部分もアーチ型をなし最大高は約3mほどと非常に高い作りとなっている。小部屋の出入り口は幅約1mで、高さは約1.6mあるが土砂の流入が及んでいる。内部には戦後のビン類の破片が多く散乱し、壁には落書きもみられる。この小部屋については弾薬庫としての機能も想定される。一方、南西部分の小部屋は入り口部分こそコンクリート造りとなっているが、通路部分は石灰岩が露頭した状態にあり、崩落の危険性も高い場所である。通路の壁面の一部には石が積まれている状況もみてとれる。この通路は、緩やかに湾曲し、コンクリート造りの観測用の窓へといったる。観測用の窓へいたる手前(南側)には、幅約1.7m、奥行約1.2mの掘り込みが設けられている。観測用の窓の設けられた部屋は、現在石灰岩が詰まった状態にあり、天井までの高さが1.1mと非常に狭く感じるものの幅は約1.1mである。観測用の窓が砲口とほぼ同じ真西を向いて設けられている。

『先島群島作戦(宮古篇)』によると長間底海岸は、上陸が予想されていない。しかし、長間底海岸の北側の突端部分にも増原高射砲陣地がもうけられており、与那浜崎の砲台と同様に



写真4 遠景（長間底浜より。←の場所が砲台）



写真5 壕口（砲口と推定される）



写真6 壕内



写真7 小部屋（弾薬庫か？）



写真8 観測室内部



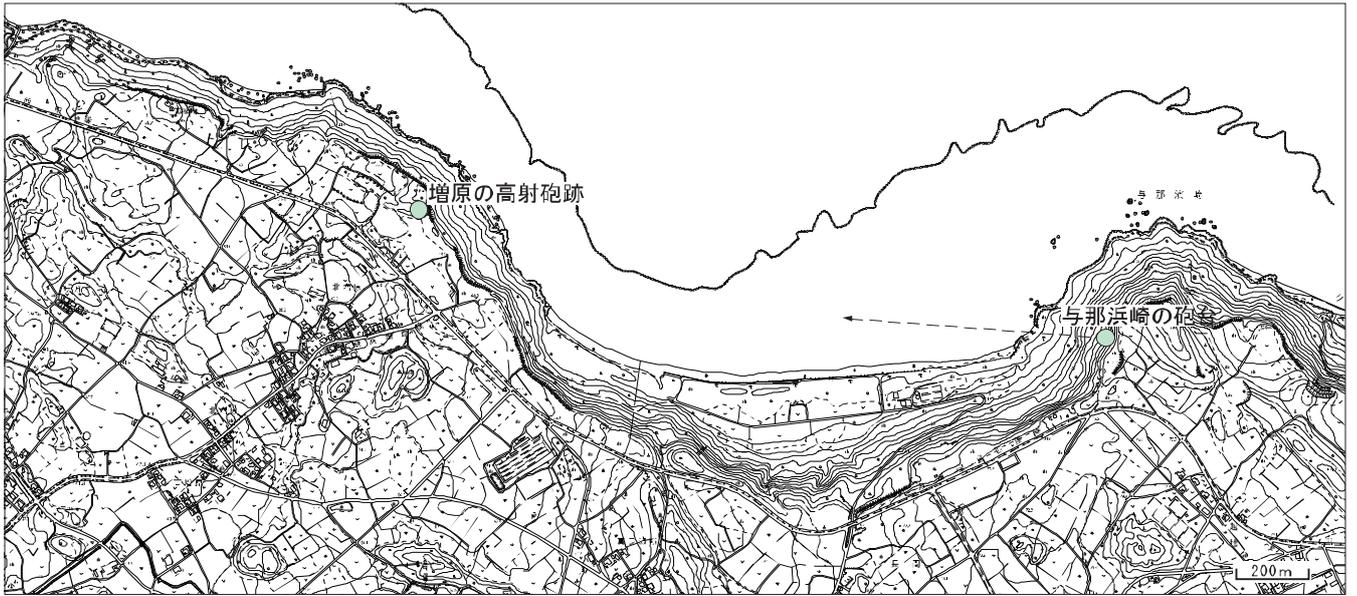
写真9 観測用窓



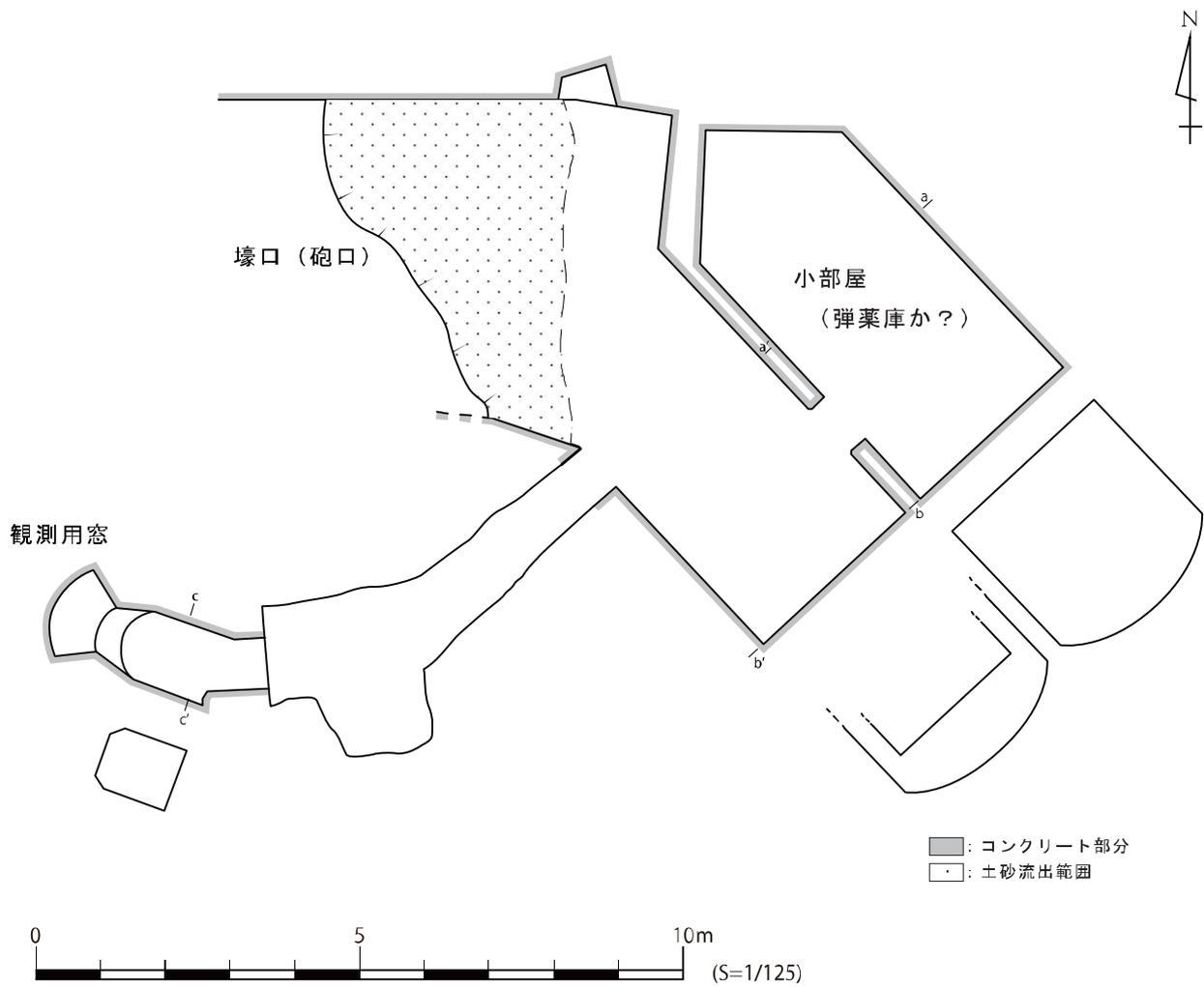
写真10 砲台から見た長間底海岸



写真11 壕（銃眼？）



第3図 与那浜崎の砲台位置図 (←は砲口の推定方向)



第4図 与那浜崎の砲台平面図 (1/125)

長間底海岸一帯からの上陸に備えて設けられたことがみてとれる。また、ここで報告を行った与那浜崎の砲台の東へ約20m進むと、コンクリート造りの窓が1基確認された。窓への入り口は現在のサトウキビ畑の中にあると想定され、現在はその壕口を確認することができず、内部へ入ることはできない。今後は、同施設の砲台との関連性についても調査を進めていくことが必要である。

3. まとめと今後の課題

現在確認できる海軍砲台3基の概要について整理を行ってきた。3つの砲台の内、パナタガ一嶺と、与那浜崎の砲弾は、石灰岩を掘りこんで壕内に大砲を設置する掩体式の砲台といえる。その一方で、友利砲台は、石灰岩を掘りこんで構築するが、大砲を格納するまでの石灰岩の丘陵を有していないことから、掩体式ではなく、天井部分を偽装するなどの方法を用いているという点で前2者の砲台とは違いがみられる。平良砲台についても、友利砲台と同様の形態を呈していたことが体験談などから読み取れ、これらの違いは立地上に起因するものと考えられる。しかし、現在確認できる3つの砲台は、砲台を設置する台座周辺を鉄筋コンクリート造りの非常に強固なつくりをなしている点で共通しており、友利砲台の東砲台の状況を見る限り、コンクリートの厚さは約60cm近くにも及んでいる。これだけの強固な構造物は、宮古島市において海軍砲台の他に、中飛行場戦闘指揮所などに限られており、海軍砲台の有する戦略上の意味は非常に高かったものと考えられる。さらに、鉄筋コンクリート造りの形態は、3基ともドーム形をなしており、非常に精巧なつくりをなしている。これらの共通点は、3つの砲台を海軍313設営隊という同一部隊の構築した大きな要素として捉えることができる。

今回の報告を行った砲台の中で、その場所や詳細が全く確認されていない砲台が平瀬御神崎の砲台である。本砲台については、『先島群島作戦(宮古篇)』や、宮古島市総合博物館収蔵の沖縄戦時に米軍が作成した地図上にもその位置がマークされていることから、砲台としての認識されていたことは確かであるといえる。しかしながら、山砲第28連隊の戦史資料や、大下氏手記にもその記載が全くみられず、体験談からも本砲台に関する情報は得られていない。今後、本砲台に関する確認調査をさらに進めていく必要がある。

謝辞

与那浜崎の砲台の各部屋の機能などについては、沖縄県立埋蔵文化財センターの山本正昭氏からご教示いただくとともに、友利砲台の場所の特定には、立津義康氏らの多大なご協力のもとに確認を行うことができました。末尾となりますが、記して感謝申し上げます。

【注釈】

注1 西更竹陣地壕については、琉球新報2015年6月8日、宮古新報2015年6月9日、宮古毎日新聞6月9日付の朝刊で新聞報道されている。

注2 埋文センター2005年以降に新規に発見された戦争遺跡として砂陣地壕、サズガーガー陣地壕、長南陣地壕、福嶺陣地壕、村越陣地壕、西更竹司令部壕、伊良部陣地壕、自衛隊基地内の壕、宮原増原高射砲壕、山田陣地壕、長南陣地壕II、ウズラ嶺陣地壕、宮原地下壕群(追加)、タキグスナル地下壕群(追加)の概要報告を、2015年10月29日の2015年度第2回沖縄県地域史協議会研修会にて報告した。

注3 『海軍313設営隊戦記と思い出』の本文第1章の中には650名とあるが、巻末の「海軍313設営隊(宮古島)戦記を記するにあたり」の中ででは550名とある。

注4 海軍313設営隊の本部には、部隊長、副長、軍医長、主計長、伊藤小隊長(第3中隊第2小隊)、第1中隊が駐屯している。また、本部の近くには機銃隊の対空機銃陣地がもうけられたとされる(参考：大下)。

注5 2004年4月15日に、旧平良市の史跡に指定されている。

注6 宮古島市史編さん室収蔵の霧生藤吉郎氏提供資料によれば、与那浜崎の砲台の構築は、海軍313設営隊第2中隊第2小隊が行ったとされ与那浜崎の砲台には海軍警備隊の長野隊が、友利砲台には、江口隊があったとされている。

注7 5隊とされているのは、山砲兵第28連隊の戦史資料においては、平瀬御神崎の砲台に関する記載が見られないことから、この平瀬御神崎の砲台を除く5つの砲台について述べられているからである。

注8 宮古毎日新聞2015年10月29日中野隆作氏投稿「戦争を再びしてはならない」によると、5月4日の艦砲射撃に際して、友利砲台は艦隊に非常に近い位置にあったものの、砲台からの発砲はされなかったとある。

【参考文献】

- ・大下繁樹『海軍第三一三設営隊戦記と思い出』 ※発行年不明
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2005年 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(V)-宮古諸島編』
- ・沖縄県立埋蔵文化財センター 2015年 『沖縄県の戦争遺跡-平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書-』
- ・神田文男『遙かなる宮古島』 ※発行年不明
- ・瀬名波栄編 1975年 『先島群島作戦(宮古編)』
- ・宮古島市教育委員会 2007年 「宮古島市が誇る宝(文化財)の散策マップ」
- ・佐山二郎 2012年 『日本陸軍の火砲 野戦重砲騎砲他』 潮書房光人社
- ・ref.C11110237800 戦史資料 山砲兵第28聯隊
- ・ref.C11110237900 戦史資料 山砲兵第28聯隊(宮古島)
- ・ref.C12122494800 15.沖縄方面部隊

※ref.は、アジア歴史資料センターのレファレンス資料番号を示す。

伊志嶺朝茂と戦後宮古の概況

仲宗根 將二(宮古島市総合博物館協議会委員)

はじめに

明治四〇年一月、平良・西里生まれの伊志嶺朝茂は大正中期、十六歳で単身出郷して、長崎県や福岡県で炭坑夫などに従事している。さらに東京へ出て職業訓練(大工)を受けたが、その後は大阪で労働運動に専念している。その間の徴兵検査(於佐世保)では甲種合格、輜重兵として三度びも軍隊に召集されている。昭和初期、労働運動に従事しているさいには、治安維持法違反容疑で拘束され、未決とも四年服役し、さらに二度めの召集では二年余、中国大陸での戦場から運よく生還している。

治安維持法違反容疑は、刑期を終えて帰郷したのちのちまで、敗戦時までもつきまとっていたようだ。特高警察が毎月一回定期的に自宅まできての動向調査である。さすがに戦地までは動向調査は及ばなかったようだが、昇進はさせず最後まで最下級の二等兵のままでの除隊である。帰郷後はさいわい町役場の臨時造林人夫をへて山林係に採用されたが、後には選挙がらみで退職させられている。その後、台湾に渡ったが、ここでは特高に代って憲兵による動向調査である。

このような苛酷な体験によるものであろう、伊志嶺の反戦、反権力、反資本家等からくる労働運動への志向は並みのもの

ではなかったようだ。台湾では在職中に敗戦を知らされたが、悲しむ同僚の目も気にせず、日本軍国主義の敗戦に、「万歳！」を叫び、ひとり祝盃をあげたという。これからは思いきって労働運動に専念できると、決意を新たにしている。

一九四五年九月、帰郷後は「宮古労働協議会」を立ち上げ、大工や左官、土木関係者を結集して「全協 宮古土建労働組合」も結成している。機関紙『宮古労働新聞』(週刊)を創刊したが、より広く一般市民に影響を広めるためであるう、十号で停刊し、新たに『宮古大衆新報』(週刊)へと発展させている。戦前・戦後を通して宮古で初めての「メーカー」も企画し、「労働歌」を刷り物にして配り、平良のまちをデモ行進もしたという。

体験の聞き取りのうち、戦前期については、先に「治安維持法下の戦前・戦中を生きる」の表題で、その生いたちから、台湾で敗戦を迎えて帰郷するまでを次のように時系列で紹介している。

一、独立をめざして、1・生い立ち、2・崎戸炭坑から逃亡、3・タコ部屋を渡り歩く、4・兵役を終え薬の行商

二、社会主義にめざめる、1・東京職業補導所に入る、2・争議応援で罰金五十円、3・獄中で「日本共産党万歳！」叫ぶ、4・瀬長亀次郎との出会い、5・無一文で

出獄

三、戦中の生活、1・町の造林人夫になる、2・敗戦で特高から解放

あとがき (沖縄県歴史教育者協議会(歴教協)宮古支部『密牙古』六号、一九七三年)

本来ならば伊志嶺朝茂氏のご存命中に整理し、ご批判を仰ぐべきでしたが、思いがけず職場が替わって、公私ともに超繁忙の日々になってしまったことに加えて、氏のご他界ということもあってその機(気)を失ってしまい、かなりの間をおいてしまった。あげて聴取者の不徳の至すところであり、忸怩たる日々を長くかこつていたのも偽らざる心境である。ともあれ本稿は戦前期につづく戦後編である。一時期同時代を共有していることもあって、あえて時系列にはせず、戦後宮古の重要事項に関連資料を添え、さらに必要箇所には説明を付して便宜を図った。項目としては一応次のように設定した。

- 一、郡民大会で「労働者団結せよ」
 - 二、戦前・戦後通し「宮古初のメーデー」
 - 三、『労農新聞』から『大衆新報』へ
 - 四、食糧増産と失業対策の「集団農場」
 - 五、「民主党」・「革新党」から「社大党」へ
 - 六、三たび平良市職員として・・・
- あとがきに代えて

一、郡民大会で「労働者団結せよ」

台湾から引き揚げて帰ってからは、山内朝源さんの向かいに、君嘉良肇の母娘が住んでいたもので、その一間を借りた。落ちついたら、大工や左官によびかけて労働組合の結成に専念した。一九四六年三月に開催された郡民大会で、「労働者団結せよ」と提唱した。

不正の摘発批判民論沸騰す！

昨日午後三時半城辺産組跡にて郡民大会開催され、難局打開の重大役割を持つ支庁当局の鞭撻並に各方面に潜在する不正行為の摘発批判が各弁士によつて俊烈に行われ言論の自由と政治熱を反映して聴衆は、平良町を始め城辺、下地、伊良部の各村民無慮三千人を数えて盛況を呈し官公吏郡議町村議の一般投票断行は一般の輿論となつて沸騰した。因に各弁士と題目次の如し

- 一、官公吏議員を公選せよ 山内 朝二
- 一、民主々義政治の確立 下地 徹
- 一、労働者団結せよ 伊志嶺朝茂
- 一、農民組合の結成 下地 恵栄

一、不正払下を是正せよ 池村 恒正

一、郡政の実権は郡民にあり 平良 彦一

決議文の即時実行、委員七名を決定す

かくて下地敏之氏を座長に押しして左の決議文を提出各項目について敏之氏の詳細な提出理由説明がありその都度会場を揺がす拍手と応援の声によって支持された。

決議文

一、宮古島は沖縄本島と同一統治下におかれたし

二、支庁長、町村長並郡会議長は四月三十日迄に一般投票により公選すべし

三、食糧、住宅、失業の諸問題を早急に解決せよ

四、米軍票を流通せしめよ

五、戦時利得税、財産税を賦課せよ

尚、これが実行方法に関して諮るところあり、座長指名で左の七名の委員が選任され実行委員は米軍政府に

郡民の総意を代表して陳情すると共に支庁当局に対し輿論を訴えて鞭撻実行せしめる事となった。

実行委員 山内朝二、池村恒正

平良彦一、平良 進

新城松雄、下地敏之

下地 徹

『みやこ新報』一九四六・三・三三

郡民大会のあと、それまで準備していた「宮古労働協議会」を立ち上げ、さらに大工や左官、土木関係者を集めて、「宮古土建労働組合」を結成した。百人余りは参加していた。組合長には私がなり、副組合長には大宜見朝広（大工）、幹事には根間定見（左官）が選ばれた。組合員にはのちに建設業で広く知られるようになった、上地暁清、狩俣恵典、花城恵俊らもいた。

労働組合結成！

治安維持法の撤廃により集会、結社の気運は醸成せられ「われらの生活を守れ」をスローガンとして郡内労働者は従来の圧伏された陰うつさを爆発しているが、殊に

平良町内の労働者、大工、日雇夫等の尖鋭分子間には労働組合結成を急ぎ合法的団体として出発、資本主義への

闘争を開始せんとして居り去る十日午後五時より東町

内会伊志嶺朝茂氏を中心として十八名の結成準備委員会が開かれた。当日は労働対資本に関する理論討議等も

活発に行われた模様で近く二百名以上の組合員を獲得して結成式をあげる段取で当日は示威運動も行われる

筈である。

『みやこ新報』一九四六・三・一三

宮古支庁は米軍の爆撃で焼失してしまっているのが、蒲間嶺下の農業試験場を仮庁舎にしていた。支庁長には宮古警察署長をしていた島袋慶輔が米軍政府によって任命されている。食糧も住宅も極端に不足し、光熱費も異常に高いこの時期、物価統制法が存続していた。労働賃金も勝手に決め、各種物資の定価表はまったく実情に合わない。独身でも、夫婦共働きでもとても生活できる賃金ではない。元々昔から大工は手間請けで仕事をしており、役所は新築家屋を調査して、間賃金でやっている、統制法違反で摘発すると脅すので、組合総会を開いて、労働賃金と物価指数の関係を調査し、統制経済をやめ、定価表も取り止めて、自由経済にするよう決議し、軍政府に陳情した。陳情文は親戚の山内朝源の弟の朝隆に翻訳させた。軍政府には、島村の娘婿がいて便宜をはかってくれた。

経済行政は戦前そのまま警察の管轄であり、警察に呼び出された。署長室には江田知吉署長と一緒にマシューズ軍政官もいて、陳情書の内容についていろいろと質問してきた。署長は定価表の必要性を強調して、魚は一匹公定いくらくらいではないかなどというので、魚一匹で生きられるかと反論してやった。最後は軍政官に、署長と二人宣誓をさせられ、翌朝十時に再度出頭するよう指示された。翌日は各新聞社も呼ばれていて、軍政官は即日、物価統制法は撤廃すると発表した。既に統制法違反で罰金を取られている者には罰金を返還せよ、

摘発されて刑務所に入っている者は直ぐに釈放せよ、略式裁判で罰金を課されている者も皆取り消された。さらに各新聞社はこの発表を報道して全郡民に知らせよ、ということになった。

この発表が報道されてから、宮古にはいろいろな物資がどんどん入ってくるようになり、うるおうようになった。奄美大島や八重山の商人も八重山にいる台湾の人もどんどん入ってきた。大っぴらな密航は取り締まりの対象にされたが、現行犯で無い限り一たん上陸した者は大目にみられるようになった。又何であれ品物はよく売れたものである。物資はほとんど本土と台湾から入ってきたが、本土からは材木なども入ってきた。台湾からはお茶やたばこも入ってきた。皆密航によるものだったと思う。

それまで警察は差し押さえた物資は定価表にしたがって販売させており、自由経済になれば大変なことになるというので、その根拠は何かと反論したが、結局、統制経済は土建労働組合の陳情どおり廃止になった。

当局の怠慢表、伊志嶺朝茂

支庁の発表せる物価の凹凸は関係当局者のプレイングラフを見たいものだ。一見して常識以下の無責任極まる余りに形式的な、余りに無神経な、そして余りに無謀な、余りに郡民生活を蹂躪した、どうでもよいという思

想のうかがわれる物価表である。自分等は特配を貰い生
活的に何等危険も不安もないものが遊び半分に”まあま
あこの位でよいであろう”という郡民侮辱の、否郡経済
攪乱の一投石にも見える。これは支庁当局が郡民に対し
挑戦している様にも見える。官吏は公僕であるというか
ら少くとも人民が主人でなければならぬのに召使下僕
たる公僕が主人に対して挑戦するとは日本の官吏の性
格からすればいざ知らず、民主建設への今日逆行も甚し
いものである。要するに物価表は当局の職務怠慢表□
であり、無責任不謹慎暴露の表であり、郡民への挑戦状
だとも言ふことが出来る。

『みやこ新報』一九四七・五・一一

二、戦前・戦後通じ「宮古初のメーデー」

宮古で初めてのメーデーは、一九四六（昭和二一）年五月
一日決行でよびかけていたが、台湾引き揚げ者のなから天
然痘患者が出て、四月二十九日以降十日間各種集会や芝居興業
等は中止、料理屋、飲食店、各学校もすべて休業となり、メ
ーデーも取り止めとなった。代って料亭二十一番で祝賀会を
催したと思うが、集会禁止令が解除された後に催したのか、
それとも翌四七年二回目のメーデー終了後に催したのか、記
憶ははっきりしない。

宮古支庁告示

平良町に痘瘡発生せるに付予防のため爾今集会及興
行、料理、飲食店の営業及び各学校の授業を向う十日間
停止す。

一九四六年四月二十九日

宮古支庁

『みやこ新報』一九四六・五・一一

勤労大衆諸君に告ぐ

伝染病予防対策に依る集会禁止のため世界的行事で
ある我々のメーデーは断腸の思いで公衆衛生遵守の意
味に於て中止の止むなきに至りし事は宮古の勤労大衆
が□しく慨歎に堪えざる所である。世界のブルジョアジ
ーに労働価値の有難味を示すべき有意義な我等の世界
的行事を又山積している勤労大衆の速急な解決すべき
問題を未解決のままに終わると言う事は宮古に於ける
プロレタリアートは当局の餓死の宣告を承認している
ことになるのだ。

宮古労農協議会は日をあらためて近日中に労働者大
会を開催し勤労大衆の正しい意見を決議し蹶然起ち上
がるべく委員会に於て決定した。

紙上を拝借して兄弟姉妹諸君の御賛同を仰ぐ次第で
ある。

一九四六年五月一日

宮古労農協議会委員会

(前掲紙)

メーデー集会は宮古

神社で百人ばかり集合して、組合旗を立てて催したが、これは翌一九四七年であつたかも知れない。「聞け万国の労働者」など、労働歌をガリ版で刷つてくばり、教えるとともに、メーデーの由来などを説明したりした。周囲は大勢の警察官が取りまいて警戒に当たつて



1947(昭和22)年5月1日、メーデー集会、正面中央旗手は伊志嶺朝茂氏、於米・英軍の猛爆で荒廃した宮古神社

いたが、全員で記念撮影もし、新聞も紹介してくれた。

昭和二十二年五月一日。当日が休日だったか否か不明。

私が仲仕組合(宮里?組合長)の若い人達を、護国神社跡地に集め、インターナショナル、赤旗等の歌を教え、メーデーを準備した。リーダーの大衆新報社長、伊志嶺

朝茂さんが、メーデーのルートを、漲水港―途中失念―西市場―パイナガマで解散を申請した。多分、警察だつたと思う。然し、出発の漲水港から、郵便局を左に廻り、小さな道を通って、裏通りからイタムガアの東辺りで解散した。B4の紙をつなぎ合わせ、何かスローガンを書いてあつた(朝茂さん)が、覚えていない。そのデモには朝茂さんを先頭に十二、三名が参加したが、仲仕組合から数名と、新里(博一)、下地(明芳)も一緒だつたと記憶している。(広島県廿日市市在住・大山盛長、一九九九・九・二三付書簡)

「護国神社跡」とあるのは、「宮古神社」の記憶違いであろう。同神社の社殿は、一九四三年九月竣工し、翌四四年六月、郷社から県社に昇格して、遷座祭・奉祝祭を催している。新装なる社殿であつたが、四五年三〜四月の米・英軍の猛爆で荒廃に帰していたため「跡」としたのである。又、「西市場」も下里市場が平良の市街地の形状から西はずれにあるため西市場と記したのである。

デモコースの「郵便局を左に廻り」も「右に廻り」の記憶違いではなからうか。旧宮古島郵便局は十字路の西寄りの角に位置していたのであり、デモの出発点を宮古神社と漲水港のどちらの場合でも市街地の形態からは「右廻り」が順当のコースと思われる。解散地点の「イタムガアの東辺り」は、

西里通りの東方前方に当たっており、矢張りこの方が順路ではなからうか。

三、「労農新聞」から「大衆新報」へ

一九四六（昭和二一）年の三月ごろであったらうか、宮古土建労働組合の機関紙のようにして「大衆新報」を創刊した。創刊の挨拶は自分で書いた。紙面づくりは一般新聞のように扱ったが、「宮協委員長」の肩書きで「権利と義務」を連載したり、「プロレタリア講座」も連載した。ガリ版刷りで、半紙大の両面刷りだったが、週三回位発行したのであろうか、この辺りははっきりしない。ガリ切りは裁判所の書記をしていた佐久田さんの奥さんが引き受けてくれた。新里俊治さんの妹ではなかったらうか。四〇〇部でいど発行したと思う。発行のつど八重山の宮良長義さんにも送っていた。

「沖繩戦」に引きつづく米軍の全面占領下、沖繩民政府総務部は宮古から「全琉球行政一元化」の要請等もあつて、一九四六（昭和二一）年六月〜七月、宮古・八重山へ調査団を派遣している。その報告書「宮古島概況」には次のような記述がある。

「宮古労働協会 一九四六年三月十五日結成 委員長伊志嶺朝茂 主トシテ台湾ヨリ帰還セル労働者ノ失業対策を中心ト

シテ活動シ機関誌宮古労働新聞ヲ週間ス」ママ「宮古労働新聞 労働協会機関誌、週刊」と明記されている。この機関紙「労働新聞」が、読者の労働対象を広げて一般読者を対象にした「大衆新報」へと衣替えしたのであろう。

宮古大衆新報発行に就て

今般宮古労働協議会機関紙労働新聞を第十号を以て廃刊致す事とし代つて宮古大衆新報を発行し一般大衆の与論を報道する大衆の機関紙として各位の要望に副うべく陣容を整えて来る七月一日創刊号を発行致す事になりました。御先輩各位の御支援を賜り度く紙上を以てご挨拶申し上げます。

一九四六年六月二十五日

宮古大衆新報

社長 砂川 恵達

主幹 伊志嶺朝茂

『みやこ新報』一九四六・六・二五

新年の広告は二回か三回は出していたはずなので、「大衆新報」は二年半から三年位は発行していたのではなからうか。印刷はガリ切りから印刷まで男女二人でやっていたが、いつも赤字で、妻の行商で給料を払ったこともある。紙面づくりでは本村武史さんが小説を連載したり、下地明増さんや伊志

嶺恒雄さんらも時々原稿を書いて手伝ってくれたりしていた。毎号検閲を受けて発行していたが、警察で検閲していたのではなかったらうか。

一九四八年か四九年のある日突然軍政府に家宅搜索され、新聞用紙や印刷用具一切、それにジョン・ガンサーの『中国の赤い星』など多くの図書まで押収していった。その後取材に出て留守中に出頭命令が出て出頭したら、以前記事にしたブラジル在日系人の、日本は戦争に勝った負けたで死傷者まで出る争いがあったが、その記事の出所はどこか、新聞用紙や書籍はどこから入手したかなどと尋問された。記事は測候所に勤務している従弟が測候所備えつけのラジオだか無線だかで入手して提供してくれたものだが、従弟の名前を出すわけにはいかず、どこからともなく、誰れからともなく聞いた、と誤魔化した。又、新聞用紙は瀬長亀次郎さんが社長をしている『うるま新報』の宮古支局として、百部位い販売していたが、そのお札のような形で提供してもらっていた。一連五枚綴りで五連提供されていて、一連は瀬名波栄さんに貸し、二連はすでに使用済みで、二連残っていたが、今後米国の用紙を使ってはならないといって、残りの用紙も全部押収されてしまった。それでは新聞を出すなど言われたに等しいと、結局『大衆新報』は廃刊にした。

社告「うるま新報支局設置」

うるま新報宮古支局は今回当社が担当することに契

約なり、当分本社の方針により無償配布を行い沖縄事情を紹介することになりました。

尚支局事務所は当社に併置致します。読者各位の御了承を乞う。

宮古タイムス社内

社長 下地恵位氏宅

うるま新報・宮古支局

『宮古タイムス』一九四六・五・一四

うるま新報

うるま新報では沖縄島各地区に支局を設置着々準備陣容を整備しつつあるが宮古島にも支局を設置、支局長に伊志嶺朝茂を起用、正式発令になった旨通知があった。

『みやこ新報』一九四六・八・一三

『大衆新報』がなぜ廃刊に追い込まれたのか。ブラジルの日系人の戦争勝ち組、負け組の争いの記事はあくまで口実で、実際には裏で、宮古民政府（具志堅宗精知事、一九四七・二・二就任）が動いていたのではないかと思っている。何しろ当時の地元新聞はどれもこれも公然と民政府を支持し、知事を「人間ブルドーザー」などと言って賞めそやしていた。しかし『大衆新報』だけはいわば反当局派で、民政府批判、知事批判をしていたからね。集団農場の害虫駆除に各町内会から強制的に動員をかけたたりしていたのも批判記事をのせている。

知事は批判されると、人前もおかまいなしで怒鳴りちらしていた。『大衆新報』がつぶされたら、土建労働組合も自然解散に追い込まれてしまった。富永岩雄さんらの「商工会」(?)が、組合員はみな土木請負師ではないかと言われて、そこに吸収されてしまったのだ。

『大衆新報』を止めたあとは暫らくは浪人暮らしで、妻の呉服の行商で何とか生活していた。インテリの奥さんたちが生活のために手離す衣類を必要とする人に斡旋したり、ヤミ船で沖繩本島の米軍基地から流れてくる衣服を農村で売り歩いたりした。そうこうしているうちに、仲宗根勝米(元平良町長)の二男昇の妻の父・名城政達(西表の船浮で石灰焼きを手広くしていて、その労働者の監督をしてくれと言われて西表へ渡った。下宿住まいで、経理係をした。本人には三百円、家族には二百円送るということであつたが、折角入ってくるお金を昇が勝手に持ち出すものだから、労務賃金が払えず、労働者に脅されたりして、結局二か月でやめてしまった。

四、食糧増産と失業対策の「集団農場」

『大衆新報』を創刊して一年ほど経過していたであろうか。宮古民政府が食糧増産と失業対策として、大野越を開拓して

「集団農場」を開設することになった。民政府の労務課長になって、集団農場の労務隊長に任命された。新里博一や砂川明芳、大山盛長ほかみんなで五、六人の記録係がいた。与儀喜文が農務部長で、担当係には仲宗根玄俊や大城喜助らがい、一日二〇〇人前後の人が開墾に従事していた。開拓後は全域にサツマ芋を植えて、引揚げ者を中心に移住させようと主張したが反対された。具志堅知事は、「集団農場」という名称は「コルホーズ」の印象を与えるのでよくないと言い、また移住政策にも反対されたので、十日でいどでやめてしまった。

与儀、大城らは農場の民間払い下げを主張していたが、最終的にはサトウキビに切り換えて、沖糖工場への搬入を画策していたのではないかと思う。

このころの宮古民政府の副知事は米軍任命の平良町長を辞任していた与儀達敏で、宮古中学出身者を多く民政府入りさせたために「宮中人事」などと言われたりしていた。

「もつとも、その『人事』は、その当時の宮古における最
高学府である宮中出身者が、社会の中堅として台頭する時機
になっていた結果であるともいえよう」(平良栄賢執筆「与儀
達敏」『平良市史』第八巻資料編6、一九八八)との見方もあ
る。

集団農場にも虫發生

佐和地集団農場の芋植付は天候と併行して至つて順調に進められてゐるが、この分なら当局の言明通り七月から集農の芋が市内に配給されるのも間違いないと思はれるが、どうしたことか瞬間に芋虫が物凄い發生となり八町歩程の農地の芋づるは一葉を認めず蔓のみ立つてゐる始末であるが、一雨にして其の葉は盛返すことが出来るかと技術家は云ふてゐる。尚この藪虫は湿地に發生する虫で宮古では現在までに下地の元沖糖工場敷地の湿地帯に發生してゐたもので集農附近ではこれが始めてであると語つてゐる。

〔宮古大衆新報〕一九四七・六・二一

集農機構一新

集団農場は開墾事業を終了したので愈々その本来の性能を發揮する事になり、経済的經營を中心とすべく機構も一新、左の如く三つに区分してそれぞれ主任をおく事になった。

第一農場 五六町三反

第二〃 六七町五反

第三〃 五三町三反

場長 大城 喜助

第一農場主任 新城 定吉

第二〃 根間 玄正

第三〃 下地 明俊

尚名称もマクラム軍政官の功績を記念する為マクラム農場と改称し場長以下農場に住み込み骨を埋める覚悟で之が經營に当たたる事になつてゐる。

〔宮古タイムス〕一九四七・一〇・一四

集農市民備忘録

一九四七年七月十七日付で平良市長から宮古知事へ出した集団農場生産並配給方法に就いて照会した文書に(中略)知事は一九四七年七月十八日宮農第二五八号で市長へ次のような回報があつた。

一九四七年七月十七日付平産第六三号で御照会された

集団農場生産物並に配給方法に就ては左記の通りです。

右回報します。

一、現在までの開墾状況

イ、伐採面積 一一三町歩

ロ、開墾面積 九二町歩一反五畝

二、栽培作物の種類反別及収量予想

イ、栽培作物 甘藷

ロ、植付反別 五十一町歩五反(七月十七日現在)

ハ、収量予想

四月植 十町歩 最低反当千三百斤 十二万斤

五月植 二十町歩 最低反当千三百斤 二四万斤
六月植 二十一町歩五反 最低反当千八百斤 三
七万五千斤

合計 五一町歩五反 七三万八千斤

三、平良市への生産物配給予定数量及び其の価格

イ、収穫甘藷は全部平良市へ配給予定

ロ、価格は集団農場運営委員会にて決定上通知す

ハ、配給予定数量（収穫配給可能数量）

七月 一万斤

八月 十二万斤

九月 二十四万斤

十月以降毎月 三十万斤

ニ、配給方法 平良市と打合せの上決定す。

備考 害虫発生のため収穫時期は遅れる見込

〔宮古公論〕一九四八・一二・一三

五、「民主党」・「革新党」から「社大党」へ

戦後初の政党は「民主党」だが、これは従来からある政党や軍国主義への反省、反対から発足したもので、当時としてはもっとも革新的な政党であったと考えている。下地敏之弁護士を中心に、一九四六（昭和二一）年三月の郡民大会を主催した人びとが執行委員になって、「綱領」や「結党宣言」も

発表した。九人の執行委員のなかに私も選ばれた。

広告〔民主党結成〕

集会禁止の都合により延期中の民主党結成準備委員会は来る二十日午後二時宮古神社に於て開催致します。

民主党発起人代表、下地敏之

〔みやこ新報〕一九四六・五・一九

広告

集会禁止のため延期中の民主党結成準備委員会は状況の好転を待つて開催することとし、発起人に於て党結成を完了し第一回党大会までの暫定的処置として発起人を党務執行委員にあげ、下地敏之氏を委員長として当面の党務を処理すると共に「公論」発表の綱領、暫定政策宣言の強力なる実現に挺身することに決定した。依つて我党の主義政策に賛同せらるるの向は当本部又は公論社宛、口頭又は文書（形式不問）を以て入党申込み相成度し。

一九四六年五月十八日

宮古民主党執行委員会

党本部平良町下里、下地敏之方

公論社同 下地 徹方

〔みやこ新報〕一九四六・五・二二

宮古民主党の結成

△執行委員

下地敏之 平良彦一 山内朝二

池村恒雄 座喜味朝奉 東風平一

池村恒正 伊志嶺朝茂

下地徹 (公論主筆)

△綱領

- ① 民主主義の態勢確立
- ② 資本主義の社会化
- ③ 人權の徹底的保障
- ④ 労働条件の根本的改革
- ⑤ 産業の機械合理化
- ⑥ 生活必需物資の管理
- ⑦ 教育の民主化
- ⑧ 貿易の早期確立
- ⑨ 移民事業の公営

△結党宣言

時代はあきらかに革新時代に突入した。敗戦と軍政施行という冷厳な現実には本郡否、南西諸島全住民を革新のルツボの中に投じ去るに至った。然して現状維持の政治的勢力と現状打破国家的社会的勢力とはここに明瞭に対立するに至った。われらの同志は鉄の如き強固な団結のもとに、宮古民主党を結成しここに革新陣営の総進軍を開始せんとする。すべて国家の革新というが如き大事業は決して、一直線に進行するものではない。これが達成せられるまでは、紆余曲折もあり、一進一退あり、現状維持勢力とは強力な闘争を演出する。明治維新にいわゆる幕末という語によって表現されている如く、革新期における社会の騒然たる姿である。ペリリが来航して明治元年に至る十五年間は、幕末史のクライマックス

であつた。

この十五年は実に維新は千変万化を遂げこれをひもとく者をして、胸を躍らしめ、息をつまらせるものがある。明治十二年の廃藩置県の示達から、二十六年旧慣制度廃止、即ち名子廃止等の改革期における、物情騒然たる本郡の姿はまた現在の姿なのだ。然しながら当時の生活せる者の多数は、果して自己自身がこの宮古の一大革新期に生活せることを意識していたであろうか。おそらく島民の大多数は漠然たる不安を感じながらも、自己自身が宮古の社会を一変せしむるに至るべき一大革新期に、自分が生活しつつあることを、意識し得なかつたであろう。本郡の今日もまた同じである。如何なる人々といえども、今日は著しき急角度をもって、変転しつつあることを感ぜざるものはいない。ただ今日この世の中の変転が如何なる革新の意義を有するかを認識せる者は稀である。幕末の人々が漠然たる不安のうちに世の移り変わりを感じたと同じ意味において、今日の郡民大衆も、また不安のうちに世の移り変わりを感じている。

然しながらそれにもかかわらず幕末の人々が、歴史の偉大な革新日本に生活していたと同じ意味で、今日の南西諸島の全住民大衆も又偉大なる、歴史的国家的革新のうちに生活しつつあるのである。ただ大多数の者が共に気付かず、少数の者のみがこの革新期の歴史的意義を

認識しているのである。過去を有する者は現状維持に傾き未来に生きる者のみが革新の担当者である。この意味において、南西諸島の大衆殊に若き青年を待望する。明治維新の遂行者はみな若き青年であった。青年は未来に生きる運命にある。革新は創造である。真に青年男子の生きる喜びは創造の中にあるのではないか、好んで革新の時機に遭遇せんと欲しても、時に恵まれなければ不可能である。今日われわれは幸いにして、この革新の時期に遭遇し、自己の力をもって、新らしき宮古を創造していくべき使命をさずけられている。この偉大なる使命の遂行こそは何人も望んで望み得ざる今日に生きつつある、郡民大衆の特権でなければならぬ。宮古郡民並に南西諸島の全住民諸君、今日の創造時代革新の時代を認識せよ、民主主義態勢の確立、資本主義の社会化等九ヶ条にわたる我党の綱領は、本郡革新の道標である。われらはこの綱領の徹底的実現に邁進せんことをここに宣言する。

〔宮古公論〕一九四六・五・一五Ⅱ「戦後・新聞の週辺」12より）

宮古民主党は機関紙『宮古公論』で、党の主張や政策を公表するとともに、宮古支庁当局に対しても「失業対策」として、道路改修や桟橋の補強工事、電信電話の復旧工事などを

要請した。低物価対策なども要請したが、一九四八年三月には、戦後始めての平良市長選挙に下地敏之委員長を擁立して当選させた。

そのころ市長は今の折田商店の裏通りの茅葺き家に住んでいたが、そこへ一人呼ばれて助役には誰れが適任かと聞かれたので、下地徹を推せんした。また戦前の町役場での山林係の経験を買われて山林課長になつてくれと言われたが、このときは辞退した。何しろその頃の平良市は山林の盗伐がひどく、又議会の焦点も山林問題ばかりでしたからね。結局引き受けることになったが、何しろ少数与党で、多数野党でしたから、庭に支持者を動員して野党を野次らしたりしたものだ。当時の議長は、伊志嶺玄良、副議長は下地淳一だった。

そのうち市長不信任問題がおきて、市長は議會を解散した。そのため敏之市長支持派として議員選挙に立候補して、定員三〇人中十八位で当選した。しかし軍政府の同意のもと、民政府知事によって市長は罷免され、代つて公選二代め市長には石原雅太郎が当選してきた。このため議會では野党にまわることになった。二期めも立候補したが、八票差で次点となり落選した。三期めもめざしたがまたも落選だった。一期めの選挙から妻の父・平良恵章や砂川恵清、砂川明芳らが応援してくれた。

市議選挙当選者決定す

たたかいほこを収めて運命を決する開票の十月九日は雨天にもかかわらず、数百の市民が開票場に押しかけ夫々支持する候補の当落如何と緊張、午後四時頃から当選圏内の十数名が浮び上るや連絡員は各候補に飛報する等、息づまる開票風景を展開、午後八時頃より二百九十票以上当選確定と見られるに至り、二百九十票を境として接戦の後、遂に次の如く当選者が決定された。かくして自由党は十六名の過半数を獲得したが、その分野を見ると自由党十六、中立五、純敏之派九となっている。然しこの分野はここ四、五日中に変動すると見られる。

四六七 新 佐藤 富夫 自
 四六四 〃 内間 俊栄 中
 四五四 〃 仲間 弘雅 自
 四五二 〃 兼村 蒲一 敏
 四四七 前 仲間 勇栄 自
 四三二 〃 大里 豊作 〃
 四二四 新 盛島 明秀 敏
 四〇一 前 浜川 武夫 自
 三九〇 〃 糸数盛之助 敏
 三八五 〃 砂川 玄令 〃
 三七五 〃 下地 淳一 自
 三七〇 〃 糸満金三郎 〃
 三六三 新 下地 邦利 〃

三六一 前 伊志嶺玄良 〃
 三五八 〃 砂川 恵勇 敏
 三四〇 〃 下地 豊吉 中
 三三三 新 与那覇和彦 〃
 三三〇 〃 伊志嶺朝茂 敏
 三二九 〃 砂川 恵盛 〃
 三二三 前 前川 三郎 自
 三二七 〃 来間 忠雄 〃
 三二四 新 花城 恵俊 〃
 三二二 〃 池村 恒雄 中
 三二二 前 荷川取浩清 敏
 三〇三 〃 熱田 真津 自
 三〇二 〃 平良 恵昌 敏
 二九八 〃 長崎 富一 自
 二九六 〃 内間 忠吉 〃
 二九三 新 真喜屋恵義 〃
 二八七 前 立津 旨源 中
 次点：二八〇前 与那城保一 敏
 二七八 狩俣金五郎
 二七七 大山 キク
 二七七 奥平 良雄
 二七一 高嶺 博昭
 二五九 長濱長二郎

- 二三五 川上 栄一
- 二二三 川上 一男
- 二〇七 保良 栄信
- 一九一 下地 寛徳
- 一七九 浜川 玄一
- 一四一 仲宗根玄昌

『宮古タイムス』一九四九・一〇・一〇)

政党としては民主党の次には、宮古青年党(一九四七・九)、宮古社会党(一九四七・一〇)、宮古自由党(一九四九・十一)などが結成されている。一九五〇年九月、初の宮古群馬知事選挙には、自由党総裁の西原雅一と前里秀栄が一騎打ちで争ったが、私は前里候補の推せん人の一人として応援した。

前里秀栄氏届出

民主党の絶対的支持をうけて前里秀栄氏は百名の連署を終え、十五日午后正式に立候補届を提出、直ちに選挙運動を展開した。なお推薦せる主なる人々は次の通りである。

- 下地敏之 名渡山愛潤 稲村賢敷 糸数盛之助 砂川 恵達 山田信一 新城恵清 高嶺博昭 盛島明秀
- 伊志嶺朝茂 平良恵昌 立津旨源 砂川恵勇 上地玄 興 与儀 栄 下地恵栄 川上一男 葦原 久

- 池間昌祥 砂川恵盛 内間俊栄 平良恵章 川上栄 一 洲鎌弘成

『宮古タイムス』一九五〇・八・一七)

選挙の結果、西原候補が当選し、宮古群馬政府が発足した。同年末ごろから落選した前里候補と応援した民主党や社会党系の人びとが新党づくりに動き始めた。こうして翌一九五二年二月、宮古革新党が結成された。下地敏之と前里秀栄の二人が顧問になり、委員長には亀川恵信医師がなった。総務、組織、宣伝、青年、婦人と五つの専門部があつて、私は宣伝部長に選ばれた。青年部長は確か中山勇吉ではなかったか。役員はたくさん居たが、下地徹や富永岩雄らも役員になったように記憶している。

一九五二年四月、公選の奄美・沖縄・宮古・八重山の四群馬政府は廃止されて、全琉球を一つにした「琉球政府」が創設された。行政主席は米軍任命で、立法院議会は公選であった。保守と思つていた自由党は沖縄社会大衆党へ、革新のはずの革新党は琉球民主党へ合流し、それぞれ宮古連合支部とになった。私は入党した覚えもないのに、いつの間にか社大党员にされていた。一九六〇年代に入ってからであつたか、西里通りのあかみね会館で開かれた社大党宮古連合支部の大会で、池村恒雄や七原の長崎さんらと一緒に顧問にされていた。当時の宮古では革新政党といえれば唯一社大党だけだったから

かも知れないね。

六、三たび平良市職員として：

議員をやめてからは、キュウリの漬けものや味噌をつくって販売した。養蜂もやったが、これは失敗だった。

一九五七（昭和三二）年十月、社大党宮古連合支部は間近に迫った平良市長選挙に、高原恵典医師の擁立を決定した。

このところ幾つかの選挙で敗戦つづきの社大党支部は、今回は何としても民主党に勝ちたいとの思いが全支部にみなぎっていたようだ。連合支部ごと「集団脱党」して、二代め行政主席に任命されたばかりで、与党づくりに腐心していた当間重剛のもとに走った。「当間系無所属」を標榜し、十一月の平良市長選挙に臨むことになった。

対する民主党は、二期八年の任期を終えて引退する石原雅太郎市長の後継者として、若い盛島明秀を公認候補に決定していた。盛島の本業は薬剤師だが、戦前に宮古出身者として唯一県会議長から衆院議員を二期もつとめた盛島明長医師の甥であり、戦後は、青年会活動をへて平良市議二期八年の任期を終えるにあつての擁立であつた。

私は高原候補から北学区を担当してくれと直接指示されて、

北学区全域に高原支持の働きかけをした。幸い当選を勝ち取り、一年近くしてから市役所に入った。一九五八年八月一日付で厚生課長として役所入りしたが、中野誠一の後任で平良市社会福祉協議会長も兼任した。翌一九五九年七月一日付で、上原松栄の後を受けて平良港港務所長に移った。ここでは初めて港湾条例を制定して、汽船のバースへの接岸が出来るようにした。バースがいっぱいときは信号機を挙げて沖泊りを指示するなどである。社協の方はほぼ一年めに、社協再編があつて、会長は市長兼務となつたために常務理事になつた。

平良市長は任期中に病死したため、後任には富永寛助役が無投票で市長に当選し、任期四年間引きつづき港務所長を勤めた。富永市長が任期四年まっとうして退任したあと、今度も無投票で自民党の真栄城徳松市長になって、ずいぶんいいめられた。知つてのとおり当時の市役所（他町村も同様でした）は、市長が替るたびに、支持党派が違つとみなされると、管理職はほとんど入れ替り、ときには一般職員でも退職せざるを得ないような、労働法はあつて無きが如き状況でしたから、仕方なかったのかも知れない。毎朝のように市長が港務所にやつてきて、「栈橋を掃除しろ」と下知するのだ。結局十日ほどは勤めたるうか、居たたまれなくなつて辞表を出し退職した。一九六三年の九月か十月ごろでしたから、市役所には戦前・戦後をとおして通算三回勤めているが、このときは五年ほど勤めたことになる。

あとがきに代えて

一九五二（昭和二七）年四月発足した「琉球政府」は、行政主席は米軍任命であったが、議決機関の立法院は公選であった。大方定例会のつど、「祖国復帰」と、沖縄県民の「国政参加」について要請決議をしていた。一九七二年「沖縄返還」の見通しがついてきた段階で、一九七〇年一足先に「国政参加」選挙が実現した。

一九六八年十一月、最初で最後の「主席公選」で、屋良朝苗主席を誕生させた革新共闘会議は、社大・人民・社会の革新三党候補を推せんして、衆議院の定数五議席の過半数獲得をめざした。全県的に三党候補の後援会が結成されて選挙戦に臨んだ。沖縄人民党公認の瀬長亀次郎候補の後援会（会長・浦崎康華、のち深沢栄一郎）の、宮古地区後援会長には伊志嶺朝茂が選任された。

選挙の結果、西銘順治（自民）、瀬長亀次郎（人民）、上原康助（社会）、国場幸昌（自民）、安里積千代（社大）の順で当選した。参議院は、喜屋武真栄（革新統一）、稲嶺一郎（自民）の順で当選している。衆・参ともに革新共闘会議の勝利といえよう。

伊志嶺朝茂の晩年は瀬長亀次郎後援会長として、各種選挙のつど人民党候補を支援し、一九七二年五月「祖国復帰」後、

人民党が日本共産党に合流したのちは共産党候補の当選のために、日常的に生涯を捧げたと言っても過言ではない。一九七九年六月五日朝茂死後は、タケ夫人がその遺志をついで後援会長をつとめている。

それより先、一九六七年十一月、戦後宮古の最大の火事といわれた、下里公設市場が隣接する商店からの出火で類焼したとき、タケ夫人の店も罹災している。全・半焼十六棟、八四世帯が罹災しており、朝茂は罹災者の後始末のために先頭に立って奮闘していたことも忘れ難い一齣である。

伊志嶺朝茂は死後、東京・青山の「解放運動 無名戦士墓」に合葬されている。第三三回合葬追悼会には、全国から五三人（うち沖縄県三人）が合葬され、一二〇〇人参列して催されている。この年までの合葬者は一万六一五人である。「無名戦士墓」は、戦前のプロレタリア作家・細井和喜蔵の著書『女工哀史』の印税で一九三五（昭和十）年に建立されている。戦後「解放運動」の四文字が加えられて、日本国民救済会の管理に移され、一九四八年三月十八日、第一回解放運動犠牲者合葬追悼会が催されている。以来毎年三月十八日に「労働、農民運動や平和運動など人民解放のたたかいの途上亡くなった人びとを顕彰、追悼」しての合葬追悼会である。

三月十八日は「人類の歴史の中ではじめて労働者階級によって政府が樹立された『パリ・コンミュン』の記念日にあつた」という。

〈沖繩県〉(三名)

伊志嶺 朝茂 一九七九年(昭和五四) 六月五日病死・享年七二

遺族〒906 平良市字西里四〇八 妻 伊志嶺タケ

一九三〇年(昭五) 大阪金属労働組合で労働運動に参加、住友製鋼争議の応援をする。同年日本共産党に入党。「八尾」のペンネームで街頭レポに参加。三二年(昭六)治安維持法違反容疑で検挙、懲役三年の判決を受ける。四六年(昭二一) 沖繩県平良町で町内の労働者、大工、日雇夫の労働組合を結成し委員長に就任。同年、「宮古大衆新報」を発刊、四九年(昭二四) 平良市議会議員に当選。七〇年(昭四五) から宮古地区瀬長亀次郎後援会長をつとめ奮闘した。

推せん 日本共産党中央委員会・同沖繩県委員会・同宮古郡委員会

(日本国民救援会『第三三回解放運動犠牲者合葬追悼会』『解放のいしずえ』一九八〇・三・一八)

この「聞き書き」は、一九六八年〜七〇年、米軍全面占領下、壮大な祖国復帰運動の過程でたたかわれた、「三大選挙」―行政主席・立法院・那覇市長―と、戦後初の「国政参加」選挙のなかで事務所詰めたときの聞き取りである。ひと息

入れた茶のむ話のように快く語ってくれた故人の在世中に公表し得なかった無念の思いは、生涯消えることはないであろう。

〈付記1〉

「瀬長がんばれ」と刑務所をめぐるメーデー歌

伊志嶺 朝茂

人民党が弾圧され、瀬長さんが宮古の刑務所に送られてきたときのことです。

瀬長さんがみどり丸で送られてくるというので、私も平良の栈橋に行つて見ました。私が行つたのは午前八時ごろでしたが、もうその頃には瀬長さんを見ようという大衆がたくさん集まっています、栈橋の両側を埋めていました。

みどり丸から降りてきた瀬長さんは、ジープに乗せられ、手錠をかけられていました。それを見たとき、胸の底からムカムカツと怒りがこみあげてきて、私はジープがやって来る栈橋の中央に立ち、両手をひろげてジープを止めようとした。私が立っているのを見て瀬長さんは顔をあげて私を見ました。久しぶりに対面し、目と目をあわせることができましたので、私はいちおうジープに道をあげました。

さっそくその日のうちに宮古刑務所に面会に行つたら、「肉親でなければ面会させない」というのです。私はこのような仕うちにふんがいで、「よし、それなら」というので、瀬長

さんを激励する方法を考えました。

その晩から、私は妻と二人で、刑務所のまわりをめぐりながら、「聞け万国の労働者」とメーデー歌を大きな声で歌い、ときどき「瀬長、がんばれ」と叫んだりしました。私は、このような刑務所めぐりを三晩か四晩つづけ、瀬長さんをなんとか激励しようと努力しました。あまりつづけると米軍や刑務所側に弾圧の口実を与えるかも知れないと思い、その後はやめました。

それからしばらくのちに、瀬長さんの奥さんたちが、瀬名波栄君らといっしょに面会に見えたときは、いっしょに面会に行きました。

あとで聞いたたら瀬長さんも「君の声は聞こえていたよ」と言っていました。

そのあと、宮古刑務所の悪い施設のなかで瀬長さんは胃腸を悪くし、診察した福嶺紀仁医師が、「この人は国際的な人だ。万一、こんな貧弱な刑務所において病気を悪くしてもしものことがあったらたいへんだ。私では手に負えない。もつと施設のよい病院で治療すべきだ」とくわしい診断書書いたので、瀬長さんは沖縄本島に送り返されて手術することになり、長浜医師の手術と治療を受けることになったといえます。

宮古から沖縄本島に送り返されたとき、米軍と刑務所側はいつ行ったのか誰にも知らせず、こっそりと船にのせ、厳重な警戒のもとで送り私たちも全然知りませんでした。

いまふりかえってみると、米軍のやり方はまったくひどい、許せない卑劣な弾圧だった、その中を不屈にたたかった瀬長さん、人民党はよくがんばりぬいた、と思つていきます。(宮古セナガ亀次郎後援会会長)

『人民』五四九号、一九七二・九・九)

〈付記2〉「セナガ」さんと「チヨウモ」さん

「カメさん」の愛称で広く県民に親しまれ、米軍の様々な弾圧にも屈することなく沖縄の戦後史を切り拓いてきた瀬長亀次郎氏が十月五日午後十時二十五分、老衰のため入院先の豊見城村の病院で死去された。九十四歳である。セナガさんの死の報道をテレビの画面で見つつ、ふと脳裏をかすめたのは故伊志嶺朝茂(イシミネチヨウモ)さんのことであった。

セナガさんは豊見城村の生まれだが、宮古にもいろいろと縁が深いと書くと、政治家なのだから当然であろうと言われる。そうである。確かに政治家として宮古へは再三訪れているが、いわゆる政治家の遊説や視察とは異なる関わりについて直接見聞いた二、三をふれておきたい。宮古の戦後史にも関わっていると思えるからである。

奄美諸島がいち早く本土復帰したことで、一九五四年十月、米軍から「退島命令」の出た奄美出身者をかくまった容疑のデッチあげで逮捕された。当時セナガさんは公選された立法院議員であり、沖縄人民党書記長であった。当時の「沖縄夕

イムス」は、二十六人の人民党員が逮捕されたと報じている。

その後、逮捕者は四十余人にもなった。同じく立法院議員の大湾喜三郎、ほんの十日前に豊見城村長に当選したばかりの又吉一郎らである。現在では、県民の土地を「拳銃とブルドーザー」で強奪して、米軍基地の拡大・強化を企図する米軍政批判の先頭に立つ沖縄人民党―祖国復帰民主勢力に対する弾圧事件であったことは明白にされている。当時は県内にこの種、弾圧事件を引き受けてくれる民主的な弁護士はいない。米国民政府裁判は弁護士なしで開廷され、一方的にセナガ懲役二年、又吉同一年の判決であった。

翌一九五五年一月、腹痛を訴えるセナガさんは、理由も示されないまま宮古刑務所に移監された。宮古刑務所では福嶺紀仁医師が往診、福嶺医師が東京出張等で不在のさいは中村（圭介）医師が往診したという。服役中のセナガさんは腹痛と吐気におそわれ、背骨から肩甲骨まで鈍痛がする。福嶺医師の診断は、病名は「十二指腸潰瘍、胃下垂症」、摘要は「安静加療中なるも症状長期に亘り一進一退、根治困難にして症状更に遷延の虞れあり、患者は特に外科的根治療法を希望して居り、依って合理的外科治療の比較的適応症を認む 一九五五年六月六日 宮古刑務所嘱託医 福嶺」『瀬長亀次郎回想録』とある。

この診断の結果、セナガさんはそれでも一月近くへた七月一日、来たときと同様海路那覇へ護送されて沖縄刑務所に入

監したあと、八月十一日コザ開放病院で長浜真徳医師の執刀で開腹手術、命びろいしたのである。このあたりのことは様々なエピソードをともなつて広く知られているようだ。

腹痛に苦しむセナガさんが理由も告げられず宮古へ護送され、平良港へおりたつたときの状況について、セナガさんは「極秘の護送だったはずなのに平良港に着くと棧橋は新聞記者や地元の人びとがむらがつている。歓迎集会みただ。棧橋を降りるとき、カサをとつてすると、看守が怒ったが『私は悪いことをしていないのだ』と胸を張って歩いたら波止場の人たちは口笛を吹いてこたえた」（前掲書）と記している。

当時は那覇―宮古間の航空路はまだ開設されておらず、船が唯一の交通機関であった。船舶の出入港ごとに平良港は五色のテープが飛びかい、現在の宮古空港以上に賑わっていた。極秘の護送ならば、世間はセナガ護送を知るはずもなく、那覇からの客船（若葉丸）出迎えの人びとが、下船するセナガさんの姿をみて、期せずして「歓迎集会」のような光景がっくりだされたのであろう、ということも考えられよう。

十数年後の記述なのであるいは多少の記憶違いがあるかもしれないが、伊志嶺朝茂さんはおよそ次のように記している。瀬長さんが（船で）送られてくるということで、私も平良の棧橋に行つて見ました。午前八時ごろでしたが、もうその頃には瀬長さんを見ようという大衆がたくさん集まっています、棧橋の両側を埋めていました。（船から）降りてきた瀬長さん

は、ジープに乗せられ、手錠をかけられていました。胸の底から怒りがこみあげてきて、私はジープがやって来る棧橋の中央に立ち、両手をひろげてジープを止めようと思いました。私が立っているのを見て瀬長さんは顔をあげて私を見ました。久しぶりに対面し、目と目をあわせることができましたので、いちおうジープに道をあげました―(「人民」五四九号―一九七二・九・九)。

チョウモさんは一九三〇年代の初めごろ、大阪で労働運動に従事していたとき治安維持法違反容疑で逮捕され、堺刑務所から沖繩刑務所へ移監されたとき、同じく神奈川県で労働運動に従事、治安維持法違反容疑で逮捕され、横浜刑務所から沖繩刑務所へ移監されたセナガさんと獄中で知り合った間柄である。

セナガさんが宮古刑務所に移監された夜から三〇四晩、チョウモさんは奥さんと宮古刑務所のまわりを歩きながら、メーデー歌「聞け万国の労働者」を大声でうたい、「瀬長、がんばれ!」と励ました(前掲「人民」)。三〇四日で止めたのは、米軍や刑務所側に新たな弾圧の口実を与えるかも知れないと考えたからだという。

復帰協を中心とする県民の壮大な祖国復帰運動は一九七〇年、復帰を待たず戦後初の国政参加選挙を勝ちとった。セナガさんは沖繩人民党公認で衆院選に出馬、宮古遊説に訪れた。伊良部へ渡る船待ちのひととき、棧橋で偶然福嶺医師に再会

した。福嶺医師「やあ、瀬長君、久しぶりだな、元気に頑張っているようだね」、瀬長「先輩には二中時代柔道部でよく投げられたが、宮古刑務所ではお世話になりました。おかげで命びろいして、元気に頑張っています。先輩は命の恩人です」と、歓談していた。県立二中在学中、福嶺医師は一期先輩であった。政治的にはつねに保守陣営とみなされていたが、親しい友人同士の語らいの雰囲気であった。

なお宮古地区瀬長亀次郎後援会長としてその場に居合わせたチョウモさんは、それから九年後の一九七九年六月五日病没、東京・青山の「解放運動 無名戦士墓」に合葬されている。(仲宗根将二)

『宮古郷土史研究会報』一二七号、二〇〇一・一一・一五

